

宇野弘蔵と河上肇*

——宇野理論の形成における河上説の影響——

柴 崎 慎 也

はじめに

本稿では、日本の経済学説史上における重要人物である、宇野弘蔵（1897–1977）と河上肇（1879–1946）の学説的関連を探究する。ここでの焦点は、宇野にたいして河上が与えた影響、とくに宇野の原理論体系の形成における河上説の影響であり、本稿ではこれを宇野がその著作物においておこなった河上への言及をすべて摘出することをもって明らかにする。宇野自身に語らしめることによって、その影響を字義どおりに観察することが本稿のスタンスである。なお、取り上げた文献についての論評および詳しい内容の説明は、そのこと自体が目的ではないため本稿ではおこなわない。文献に書かれている記述を精確に切り出し、それをもって確定ないし推定できることのみを提示することに徹する。

本論に先立って、本稿が宇野と河上の学説的関連を探究するにいたった問題意識ないし経緯を明らかにしておこう¹⁾。宇野理論の名称で知られる経済学体系は、これまでもしばしばその独創性に言及がなされてきた。これまでの通説的な理解にしたがえば、宇野はマルクス『資本論』（1867・85・94年）、ヒルファディング『金融資本論』（1910年）、レーニン『帝国主義論』（1917年）をベースに、原理論・段階論・現状分析の三領域によって構成される独自の方法的三段階論を提起し、これにそって原理論および段階論を独自に再構成したとされる。

まず、原理論に関して宇野は、商品・貨幣・資本を論じる『資本論』第1巻「資本の生産過程」の第1篇「商品と貨幣」および第2篇「貨幣の資本への転化」を「資本の生産過程」から切り離し、第2篇「生産論」と第3篇「分配論」をおいた全三篇からなる原理論体系の第1篇「流通論」として独立化させた（=流通論の独立化）²⁾。これはベーム・バヴエルク『マルクス体系の終結』（1896年）による『資本論』批判以来、一大争点となっていた労働価値説の論証に独自の解決方向を示したと評されると同時に、商品・貨幣・資本を市場システムの構成要素として、生産システムを対象とする第2篇の生産論とは異質の理論領域として整備したと評されている。

他方、段階論に関して宇野は、資本主義経済の歴史を重商主義段階（16～19世紀初頭）・自由主義段階（～1870年代）・帝国主義段階（～第一次大戦）の三つの発展段階として構成した。段階としての歴史把握や1870年代以降を帝国主義として捉える研究は従来から存在

したが、宇野の学説は、資本主義経済を三段階の歴史理論として原理論に照応するかたちで独自に構成した点をもって評価されてきたのである。

しかしながら、宇野の学説がどのような経緯で誕生したのか、とりわけ戦前日本の経済学説といかなる関連をもつのかといった学説史的アプローチから宇野に迫った研究は、一部の例外を除き、これまでほとんどなされてこなかった。宇野の学説を継承するか否かにかかわらず、独創的と評される宇野の学説の淵源はこれまで、『資本論』や『金融資本論』『帝国主義論』といった海外の研究に概ね求められてきたのである。

このことは、宇野の学説の独創性を見誤ることになるばかりか、戦前のとりわけ日本の経済諸学説と宇野の学説との関連を見落とすことにもつながろう。さらには、日本で彫琢されてきた経済学説の日本的独自性を切り出すことの障壁にもなりかねない。また、この障壁は同時に、日本において独自に発展してきた経済学説が放つ学問的インパクトを海外に発信するうえでの重大な障壁ともなりかねないであろう。

もっとも、近年、宇野の学説の先駆を戦前日本の学説史のなかに見出そうとする研究があらわれてきた。原理論に関しては、小幡〔2017〕が、流通論の独立化の先駆として河上肇の『経済学大綱』（河上〔1928b〕）³⁾に言及している⁴⁾。段階論に関しては、馬場〔2011〕が、宇野に示唆を与えた先駆として矢内原忠雄（1893–1961）の論文（矢内原〔1929〕）に言及している⁵⁾。これらは宇野の学説におけるその独創性を戦前日本の経済学説との関連において相対化し、従来みられなかった切り口から学説史を編みなおす試みといえよう。

しかしながら、これらの言及は、宇野説と河上・矢内原説との形式的同一性を指摘するものであっても、必ずしもいわば物証ともいいうる十分な資料研究に裏付けられたものではない⁶⁾。宇野の学説を戦前日本の学説史のうちに位置づけ、これをもって宇野の学説の独創性および日本で発展してきた学説の日本的独自性を明確にするには、したがって、学説的結びつきを示す物証を、宇野・河上・矢内原の三者に関連する膨大な資料のなかから提示することが不可欠となろう。

本稿は以上の問題意識から、まずは原理論を焦点に、河上の宇野への影響を現時点で利用できる限りの資料をふまえて明らかにする。第1節では、宇野の主要文献が網羅された『宇野弘蔵著作集』（全10巻・別巻1、岩波書店、1973・74年）における河上への言及を追跡する。第2節では、『著作集 別巻』に所載の「宇野弘蔵 著作目録」に記載された文献のうち、『著作集』未収録の文献における河上への言及を探る⁷⁾。第3節では、上記の「宇野弘蔵 著作目録」に記載されていない、近年発見された宇野の新資料における河上への言及を確認する⁸⁾⁹⁾。なお、すべての節にわたって、宇野が自身の人生を回顧した文献、宇野〔1970〕を適宜引用・参照する。

1. 『宇野弘蔵著作集』における言及

『宇野弘蔵著作集』において宇野が河上に言及しているものは、以下の文献①～⑯である（発行年月順に古いものから配列、【】内は『著作集』収録巻を示す）。

- ① 「『貨幣の必然性』——ヒルファディングの貨幣理論再考察」（『社会科学』改造社、第6巻第1号、1930年6月）。【3】
- ② 『資本論体系 中』〈経済学全集第十一巻〉（改造社、1931年10月）。【5】
- ③ 「マルクス再生産論の基本的考察——マルクスの『経済表』」（『中央公論』中央公論社、第47年第12号（第539号）、1932年11月）。【3】
- ④ 「『相対的剩余価値の概念』」（東北帝国大学経済学会編『研究年報 経済学』岩波書店、第5号、1936年11月）。【3】
- ⑤ 「資本論研究の最高水準——河上肇著『資本論入門』」（『書評』日本出版協会、創刊号、1946年12月）。【別】
- ⑥ 「『価値論』について——迫間眞治郎氏の読後感に答ふ」（『経済学研究』紀元社、第3集、1949年11月）。【3】
- ⑦ 「私の読書遍歴」（『日本読書新聞』日本出版協会、第531号、1950年3月）。【別】
- ⑧ 「学究生活の思い出」（『思想』岩波書店、第401号、1957年11月）。【別】
- ⑨ 「経済学における原理論と段階論——『金融資本論』における両者の混同について」（『思想』岩波書店、第433号、1960年7月）。【9】
- ⑩ 「柳田さんの思い出」（『法政』法政大学、第10巻第12号、1961年12月）。【別】
- ⑪ 「社会科学としての経済学の方法について」（『現代と人間——第12回 駒場祭記念 学術講演集』東京大学教養学部第12回駒場祭委員会、1962年2月）。【別】
- ⑫ 「マルクスの方法と社会科学」（『学生学会報——ゼミナール大会報告集』法政大学社会学部学生学会、第4号、1965年1月）。【別】
- ⑬ 『価値論』（再刊）〈青木全書〉（青木書店、1965年9月）。【3】
- ⑭ 「経済学のすすめ」（『経済セミナー』日本評論社、第119号、1966年4月）。【9】
- ⑮ 「河上肇博士の外国留学無用論」（『図書』岩波書店、第218号、1967年10月）。【別】

- ① 「『貨幣の必然性』——ヒルファディングの貨幣理論再考察」（1930年6月）

宇野が執筆したはじめの論文であり、二カ所で河上にふれられている。

ひとつは、「河上博士の言葉を借りれば」（【3】61頁）の文言について、河上の『資本論入門』（河上 [1932]¹⁰⁾からの引用がなされている¹¹⁾¹²⁾。引用の内容はともあれ、これはひとまず、宇野がこの論文を執筆する時点で『資本論入門』を読んでいたことを示している。

またひとつは、論文末尾に付されている「追記」である。

「追記 最近、わが国のマルクス経済学研究も一段の発展をとげ、もはやマルクスにおいて単に古典的なるものの発展を求むるのでなく、真にマルクス的なるものを明らかにすることが行われている。これはマルクスの経済学に留らず、その全範囲にわたる研究の結果であると思うが、経済学の範囲では、長い間の価値論の論争が生みだしたものであろう。マルクスの価値形態論、貨幣論の研究がそれである。この一文も全くかかる発展の影響に刺激されて、筆をとって見た一試論である。したがってこれによってヒルファディングの『金融資本論』の価値を云々せんとするものでは決してない。ただ価値形態論の重要性を考えてみたかったのに外ならない。誤解を恐れて一言しておく次第である。」（【3】75頁）

ここに記されていることは、のちの文献でくり返し宇野自身が述べていることである。宇野を刺激し筆をとらせた価値形態論、貨幣論の研究とは、ここでは名前こそ明示していないが、河上の研究である。河上の価値形態論の研究は「真にマルクス的なるものを明らかにする」ものであり、「それまでに価値形態論はやられていない」と評していることからは、若き研究者であった宇野にとって河上の先駆性は際立つものであったということができよう（宇野〔1970〕308-309頁）¹³⁾。

②『資本論体系 中』（1931年10月）

この文献では、「第5章 流通期間と流通費用 2 流通上の諸費用」を論じる箇所において河上の『経済学大綱』が参照されている。

「レンナー及び河上博士（……河上肇『経済学大綱』改造社経済学全集第一巻二六六一七頁）は、」（【5】339頁）

ここではこの論稿の執筆時点において、宇野が『経済学大綱』を読んでいたことを確認できよう。

③「マルクス再生産論の基本的考察——マルクスの『経済表』」（1932年11月）

冒頭において、いわゆる資本蓄積＝再生産論論争¹⁴⁾に言及する箇所で河上の名前が出されている。

「往年わが国でも福田、河上両博士によって、さらにまた高田保馬氏、猪俣津南雄氏等も参加して論壇に盛んに論ぜられたが、これも終にその解決には達しなかった。」（【3】102頁）

④「『相対的剩余価値の概念』」（1936年11月）

櫛田民蔵（1885-1934）の文章が引用されているが、その引用文中に河上の説が出てきている。

「わが櫛田民蔵氏もまた「河上博士が『諸家の論争』において問題の解決の端緒として『資本論』第一巻相対的剩余価値論の一節を引用されたことは当を得た仕方であった」（櫛田民

藏全集第三卷『農業問題』二〇一頁)とせられ、」(【3】89頁)

⑤「資本論研究の最高水準——河上肇著『資本論入門』」(1946年12月)

河上の『資本論入門』の書評である。宇野における河上の評価および影響がわかる箇所のみを引用する(各引用に記号A~Dを付す)。

A 「我が国における『資本論』研究も、われわれの知る大正八、九年以後からでも非常な進歩を示している。河上博士がこの間殆んど常にこの指導的研究家の一人であったことはいうまでもない。」(【別】172頁)

日本におけるマルクス経済学の進展において、1921年(大正10年)は重要な起点となる¹⁵⁾。資本蓄積=再生産論論争が1921年に開始され、次いで翌1922年に価値論論争が、1928年には地代論論争が開始される。見落としてならないのは、この三大論争のすべてに河上が関わっていることであり、この引用Aもそのことを指すものと考えられる¹⁶⁾。「われわれの知る大正八、九年以後」からわかるように、宇野の研究のスタートに『資本論』だけがあったのではなく、同時に河上の研究があったことは(文献⑦でみるように、宇野においては河上の研究が『資本論』に先立つものとしてあった)、宇野の『資本論』研究を理解するうえで枢要な点といえよう。

B 「『資本論入門』は、こうして出来た博士の資本論研究の最高の水準を示すものといってよい。少くともこの書物が最初分冊本として出版された当時の愛読者の一人としての私にとっては、この博士の研究を理解し、これを踏台として自分の勉強を進めることができたのである。現在は勿論のこと、当時も全然異論がなかったという訳ではない。」(【別】173頁)

文献①では、『資本論入門 第1巻 上冊』(弘文堂書房、1929年4月)が引用元として利用されていたが、この引用Bからはそれに先立つ分冊版(1928年4月~1929年2月)の出版時から宇野が『資本論入門』を読んでいたことがわかる。

C 「私一個の経験から言えば、私はこの書物によってマルクスの経済学説における「価値形態論」に非常な興味を持つことになった。私は今でも『資本論』の経済学説史的意義から言って、その「価値形態論」は非常に重要なものと考えているのであるが、この点をこれだけ詳細に論究したものは、そう多くはない。」(【別】173頁)

『資本論入門』の分冊版は、1929年2月までにいったん第8分冊まで刊行されたが、このうち第2分冊から第7分冊までが「第一章 商品」の解説である(第1分冊は「序説」、第8分冊は「第二章 交換過程」)。また、この八分冊から成る『資本論入門 第1巻 上冊』の全492頁のうち、価値形態論(「第五、価値形態およびその発展」)には90頁が割かれている。分冊版のはじめからの読者であれば、河上のこの詳細な『資本論』研究に当時圧倒されたであろうことは想像に難くない。なお、『資本論』第1巻をすべて解説した『資本論入門』

(改造社, 1932年11月)の全968頁でみれば、商品論にはうち234頁、価値形態論には56頁が割かれている。たんにその分量からしても、価値形態論を含む商品論の重要性を河上が示唆していると捉えることに、特段異論はなかろう。ともあれ、この引用Cから、宇野における価値形態論の重視は、その源流を河上に求められることは確認しておきたい¹⁷⁾。

D 「この書物が書かれるまでに出版された博士の数々の「資本論解説」が文字通り集大成されたものといってよい。」(【別】174頁)

『資本論入門』の刊行に5年ほど先だつ1923年5月から、『社会問題研究』¹⁸⁾に「マルクス資本論略解」(河上 [1923-26])が19回にわたって連載されている。また、1923年8月には、京都帝国大学夏期講習会にて「資本論大意」(河上 [1923b])の題目のもと『資本論』全三巻の概要の講義がおこなわれている。『資本論入門』は、こうした一連の『資本論』研究をふまえて刊行されたという経緯をもつ¹⁹⁾。引用Dに示された、宇野が目を通していたことがうかがわれる『資本論入門』にいたるまでの河上の「数々の「資本論解説」」には、こうした研究が含まれていよう。

⑥「『価値論』について——迫間眞治郎氏の読後感に答ふ」(1949年11月)

「私がマルクスの価値論で特に形態論を重視しながら、その内容規定についてくどくどと下手な談議を並べたのも、全くこの歴史的形態規定を明らかにするためにしたことであつて、その内容規定そのものに価値の問題を求めたわけではない。迫間氏は、その点では全く私の期待に反して寧ろその方に問題の点を求められているように見える。もっともこの価値の形態論はすでにわが国では河上博士の『資本論入門』以来研究せられて来ていることで、私がいまさら書き加える必要もないことであるといわれれば、或る点ではそうもいえないこともないであろうが、まだまだこの形態論の研究は、どんなに強調しても強調し過ぎることはないといえるのではないであろうか。」(【3】404-405頁)

ここでも、河上における価値形態論の研究の先駆性が述べられているにくわえて、価値形態論の研究の重要性が念押しされている。

⑦「私の読書遍歴」(1950年3月)

「大学に入って経済学をやればマルクスを読めるだろうというのが従来の法科志望を変えた理由だったが、なかなかそうはゆかなかった。その頃はもうアメリカから英文のパンフレットを郵便で取寄せる方法を教えていたので、マルクス、エンゲルスも多少は読んでいたが、さて『資本論』となると、研究室で見まわしても手は出なかった。今少し本当に読めるようになってからやりたいという気がするのであった。図書館や研究室ではむしろサンジカリズムの本などを借りて読んだのである。しかしその内に河上博士の『社会問題研究』、山川均氏の『社会主義研究』によってマルクスも大分身近く感じられて来た。特に高畠氏訳

のカウツキーの解説は非常に興味をもって読んだ。」（【別】77-78頁）

宇野が『資本論』を読みたいと思い始めたのは、高等学校時代（1915年7月～1918年7月）の2、3年ごろであり²⁰⁾、大学時代（1918年7月～1921年4月）には手に取ることのできる環境にあったものの、一頁も読むことなく卒業している²¹⁾。その後、1921年5月に大原社会問題研究所に入所、また同年にはカウツキー版の『資本論』第1巻が日本に入ってきておりすぐに買い求めたものの、なおも読むことができなかつたようである²²⁾。宇野が『資本論』を実際に読むのは、1922年9月以降のベルリン生活においてである。

文献⑦の引用からは、大学時代に研究室に『資本論』はおいてあったが手が出なかった、『資本論』を読む前にマルクス、エンゲルスの別のものは読んでいた、『資本論』を読む前に河上の『社会問題研究』を読んでいた、山川均（1880-1958）の『社会主義研究』²³⁾およびカウツキー（1854-1938）の『資本論解説』（カール・カウツキー著・高畠素之訳〔1919〕）²⁴⁾も『資本論』を読む前に読んでいた——以上のことがわからう。宇野の読んだ『資本論』が、したがって、河上や山川、カウツキーのフィルターを通して読んだ『資本論』であることは、ここで確認しておこう。

⑧「学究生活の思い出」（1957年11月）

「そういうわけで折角大学の経済学科に入ったのに、『資本論』はついに一頁も読まないで卒業することになった。もちろん当時ようやく盛んに出だした社会主義的文書は相当乱読したのであるが、殊に山川（均）さんや河上博士の論文は出るごとに殆んど残さず読んでいたのであるが、『資本論』のホン物を読まないでは、という気持が非常に強く私を支配していくので、卒業後も何とかしてそういうことのできるところに就職したいと思っていた」（【別】89頁）

宇野が大学を卒業する前の1919年には、社会主義関係の雑誌が数多く創刊されている。1月には河上の『社会問題研究』、2月には『我等』（我等社）、4月には山川らによる『社会主義研究』（平民大学）、そして宇野ものちに多く寄稿することになる『改造』（改造社）、6月には『解放』（大鎧閣）が創刊されており、当時はこれらにくわえて『中央公論』（中央公論社）や『新社会』（壳文社）、『太陽』（博文館）といった雑誌が発行されていた²⁵⁾。「当時ようやく盛んに出だした社会主義的文書は相当乱読した」というのは、こうした雑誌に掲載されたものであろう。

また、文献⑦にひきつづき山川に言及しており、さらに「論文は出るごとに殆んど残さず読んでいた」ことからは、河上にくわえて山川も宇野に影響を与えた人物であることがうかがえる。

⑨「経済学における原理論と段階論——『金融資本論』における両者の混同について」
(1960年7月)

「レニンはただヒルファディングの貨幣論の誤りを指摘するだけでその理由を明らかにしていない。私はその点を自分自身に明らかにしておきたいと思って、ヒルファディングの貨幣論に関する論争を多少しらべてみたのであるが、カウツキーの詳細なる批評も十分にその根拠を明らかにするものとは考えられなかつたので、自分でも批評論文を書いたのであった(『貨幣の必然性』——『社会科学』一九三〇年六月号〔『資本論の研究』所収〈本著作集第三卷所収〉])。今から考えるときわめて不十分なる批評に終つているのであるが、昭和初年当時わが国では河上肇博士によって『資本論』の第一巻の第一章「商品」論における価値形態論が詳細に研究されていたので、私はこの点の考察がヒルファディングに欠けていることを明らかにすることことができたのである。それは実はカウツキー自身にも明確にはなつていなかつたのである。もちろん基本的にはヒルファディングのような原理論の使用の仕方自身に問題があるのであるが、しかし価値形態論に対する無理解も彼の理論に特徴的な一面を示すものといってよいのである。」(【9】79頁)

ここでは、文献①を執筆した際の問題意識が明らかにされている。のちにくり返し論じられているが、ヒルファディングにおける価値形態論の無理解を指摘するうえで、河上の研究が役立ったとのことである。

なお、くわえて、ここでは「基本的にはヒルファディングのような原理論の使用の仕方自身に問題があるのである」ことが指摘されている。これについては、文献⑪の引用Bの箇所で論じる。

⑩「櫛田さんの思い出」(1961年12月)

A 「櫛田（民藏）さんは、現在、法政大学に所属する大原社会問題研究所の有力な所員の一人であったが、河上肇博士と共に、我が国における『資本論』研究の草分けである。私の『資本論』研究も、この二人の先達に負うところが非常に多い。しかし、私には、どちらにも親しく個人的に指導して貰うという機会は殆んどなかつた。」(【別】122頁)

櫛田と河上を「我が国における『資本論』研究の草分け」と評している。櫛田に関する小論でわざわざ河上を挙げていることからみて、宇野の河上にたいする評価がうかがえる。また、研究上大きな影響を両名から受けているものの、直接の指導はほとんど受けていないとのことである。

では宇野は、経済学に関してどの人物からの指導を受けたのであろうか。これについては、つぎのように述懐されている。

「ぼくが今までやった経済学、東京大学で山崎（覚次郎）先生に原論を聞き、政策論を河津（遼）さんから、経済学史を河合（栄次郎）さん、経済史が新渡戸（稻造）さんに教わったが、いずれもぼくにとってはこれが経済学だというものはなかつた。そのほかの講義も

ちっともおもしろくなかった。だから東京大学にいるときには、『資本論』が読めるようになるためにと思っていたんだが、なんにも役に立たなかった。大学の三年間は河上肇と山川均に『資本論』の手ほどきを受けたようなもんだった。大学で教わったものはすべて経済学の一般概念としても役に立たない。価値論だろうが、貨幣論だろうが、なんにも役に立たない。山崎先生の貨幣論に多少興味があって演習にも加わったが、先生の貨幣価値論は、歴史的に前のものをずっと受け継いでいるという説なんだからなんにもならない。(笑)だから『資本論』を読んだときにはじめて経済学の概念を知ったようなものだ。」(宇野 [1970] 220-221頁)

大学時代、つまり『資本論』を読む前に経済学を山崎覚次郎(1868-1945)らに習ったがどれも役に立たず、実質的には河上と山川に学んだと述べられている。要するに、宇野は独学である。独学で河上や山川、櫛田らの文献を涉獵し、それをとおしてさらにまた独学で『資本論』にアプローチしていることがわかる。

B 「私が初めて書いた論文の掲載された雑誌『社会科学』が発行されたとき、私は偶然に上京していたのであるが、櫛田さんは早速、私を本郷の宿に訪ねて下さって、「今、君の論文を読んでいるところだ」といわれて、いつもの和服の懐からその雑誌を出しながら、「この問題は、しかしヒルファディングだけでなく、カウツキーも理解していなかったのではないか。君は一体誰によって書いたのか」と問われ、私はその返答に困ったことがあった。私の論文は、ヒルファディングの『金融資本論』における「貨幣の必然性」を、カウツキーの所説を利用しながら批判したものであるが、根本は、あの論文の後書きにもしるしておいたように、河上博士の価値形態論の研究によったものであって、私もカウツキーがその点を明確にしていなかったことは感知していたのであった。櫛田さんは、私達がすでに我が国における『資本論』の研究を踏み台にしていることを、後書に書いてあっても、注意されなかつたのである。」(【別】123頁)

文献①に関するエピソードであるが、これにはつづきがある。

「櫛田さんは、ぼくのひがめかもしれないけれど、ぼくの論文を読んでから以後、価値形態論を重要視するようになったのじゃないか……ぼく、だれにもい今までいったことはないんだけれど、そう思うんだ。

.....

ぼくは、その後の論文には「価値形態論」を経たような考え方が出ているような気がするんだ。

.....

ぼくの論文の出たあとで書いている価値論だったと思うが、ぼくは、「ははあ、櫛田さんも相当価値形態に気をつけたな」という感じがしたのですね。密かにそう思っていたんだ。」(宇野 [1970] 300-301頁)

宇野が海外の研究ではなく、日本の、とくに河上の価値形態論の研究をベースに文献①を書いていることに当初気づいていなかった櫛田も、のちに文献①をきっかけにしてか価値形態論を重視するようになったという学問的交渉のエピソードである。引用にみられる、「私達がすでに我が国における『資本論』の研究を踏み台にしている」との言い回しは、海外の『資本論』研究に還元されない、河上の研究に端を発する日本に独自の研究の萌芽を宇野がかぎとっていることをうかがわせる。

⑪「社会科学としての経済学の方法について」(1962年2月)

A 「最初はまだ『資本論』が論ぜられるということはほとんどなかった時代だったので、その間にだんだんと解説もされ、論争もされてきた。河上肇博士、櫛田民藏氏あるいはまた山川均氏等と、たとえば小泉信三氏とか福田徳三博士等との論戦が行われるにしたがって、私も『資本論』に入門することができるようにになった。」(【別】386頁)

文献⑤の引用 A で述べたように、宇野の『資本論』への入門には、河上が関わっている戦前の三大論争が重要な役割を果たした。宇野はこれを独学で消化しながら、その体系を構築していったのである。

なお、同文献における「レニンも『帝国主義論』の書き出しに…」(【別】391頁)以下の文章は、文献⑨と同様に文献①の執筆の背後にある問題意識が書かれたものであるが、これにつづけて別の問題があったことが、以下のように記されている。

B 「それはともかく、ヒルファディングのような『資本論』の利用の仕方は許されないんじゃないかということは、その当時から深く自分の考えの中にあったといってよいんです。レニンも帝国主義論を書いた時に『資本論』に続く理論的展開のようなことをいっている。しかしヒルファディングのような不細工なことはしていない。『資本論』に続くようにいいながら、原理的展開を続けないで、帝国主義の時代に特有な現象を取扱っている。これはちょっとおもしろいことだと思うんです。レニンは非常に頭のいい人で、いわば『資本論』をも、『金融資本論』をもいわゆる藁籠中のものとして帝国主義論を説いている。したがってヒルファディングのような、生半可な理論的展開はしていない。非常にわかりよくなっている。それは実際上『資本論』とは、いわば次元の違う、私のいわゆる段階論になっている。そこにレニンの鋭さがあるといってよいと思うんです。」(【別】391頁)

河上に学んだ価値形態論をもってヒルファディングの貨幣論に挑んだ文献①であったが、これは同時に原理論と段階論を区別する宇野に独自の方法論を萌芽させる起点ともなっていることが理解できる。この点については、つぎの文献⑫においても明確にされている。

⑫「マルクスの方法と社会科学」(1965年1月)

「『資本論』の価値形態論なんかは、西洋の諸国じゃやらないんで、レニンの場合もどうか

と思うが、それはともかくとして、日本では、すでに河上肇という偉い、非常に熱心な、献身的なマルクス経済学者によって価値形態論が非常に詳しく解説されていたんで、私はそれによってやったわけです。今からみると、どうも全面的に正しいとはいえないが、しかしそれによって私はヒルファディングを批評したと今も思っている。これはヒルファディングのように必要だと思うところを勝手に『資本論』から抜き出してやるというようなことをやるからああいう間違いを犯すといってよいのではないかと思う。これは、やはり『資本論』と『金融資本論』との関連を考えなくちゃいけない。レニンになると、その点は、要領がいいんです。あの人は、非常に頭がいいからそういうようなことはやらない。しかし出発点はヒルファディングと同じように『資本論』の続きだというところから出ている。そして資本主義が発展するに従って独占資本が出てくるということをマルクスによっている。ところがこれは、原理的にはいえない。そこに『資本論』と『帝国主義論』との関連のおもしろい、しかし困難な点がある。」（【別】41-412頁）

文献⑪にひきつづき、ここでは文献①から出てきた課題として、『資本論』と『金融資本論』『帝国主義論』の関連という方法論についての問題があることが明示されている。この宇野理論に独自の method論にまで研究のスタートとなる文献①が及んでいることは、価値形態論を詳細に論じた河上の影響が宇野の経済学体系そのものにまで大きな影響を与えていていることを意味していよう。

⑯『価値論』（再刊）（1965年9月）

「しかし当時は私も価値論はいまでもなく、価値形態論にしても、今のような明確な形で『資本論』の論証の方法に異論をもっていたわけではない。もちろん、価値論にしても、価値形態論にしても、その他経済学のあらゆる分野で私はほとんどすべてを『資本論』に学んだものであるということには、その当時も今も変わりはないが、価値形態については、とくにその重要性を教えられたように思っている。戦前、私の始めて書いた論文は、ヒルファディングの『金融資本論』における「貨幣の必然性」を批評したものであったが、それは河上肇博士の『資本論入門』で教えられた価値形態論によったものであった。ヒルファディングの貨幣論の誤りは、マルクスの価値形態論を理解しなかったことによるものとしたわけである。しかしその後、マルクスの価値形態論を繰り返し考えてゆくうちに段々と価値の実体論の論証そのものに疑問をもつことになった。この資本論研究会において価値形態論についての発言も、実は価値論の論証そのものに連なるものであった。研究会で大変な論戦になつたのもあるいはそのためではないかと考えられる。もちろん、私はマルクスの労働価値説そのものを否定するのではない。その論証の方法に疑問をもつたのである。」（【3】195-196頁）

再刊された『価値論』の冒頭の「再刊にあたって」からの引用である。ここでも文献①における河上の影響が述べられているが、さらにその後、価値形態論から労働価値説の論証の

問題に歩みをすすめたことがこの引用からわかる。なお、「資本論研究会」については、文献¹⁷および²⁴ Bで扱う。

⑭「経済学のすすめ」(1966年4月)

「しかし、その当時は独法からは東京大学の経済学科へは入れなかったのに、ちょうどわたくしが大学へ入る年に経済学部が独立することになって、独法から来てもよろしいというので経済学科へかわれることになった。それまでは、東京大学へ行けなければ京都大学に行って経済学をやろうかとも思っていた。事実、東京大学には論文などで知っていた先生はほとんどいなかった。むしろ京都大学の河上（肇）さんや、米田庄太郎さんは、書かれるもので知っていた。ことに米田さんのサンディカリズムの紹介は、たしか『国民経済雑誌』に連載されたのを非常な興味をもって読んでいた。」([9] 402-403頁)

文献¹⁸でも述べられているが、宇野は大学に入学する前から河上を知っていたとのことである。文献¹⁵において読んでいないと明言しているが²⁶、河上のベストセラー『貧乏物語』(弘文堂書房)の出版は宇野の大学入学(1918年7月)に先立つ1917年3月であることから、高等学校時にすでに河上の存在はひろく知られていたのであろう。

⑮「河上肇博士の外国留学無用論」(1967年10月)

「有名な『貧乏物語』は、ついに読んでいないが——したがって「考える人——五つの箱」〈岩波文庫案内書〉の「人間の解放」にこの本が入っているのは、選者の一人だった私の推薦によるのではないが——しかし『社会問題研究』が出るようになってからは、河上さんの著書、論文は殆んど洩れなく読んでいるので、思想的にはともかく、マルクス経済学入門ということでは、河上さんは私にとっては極めて有りがたい先生だった。もっとも直接に教わったことはないので、お目にかかったのは一度きりだった。それも非常に偶然のことからだった。」([別] 153頁)

『社会問題研究』は1919年1月から刊行されているが、これ以降、河上のものは「殆んど洩れなく読んでいる」とのことである²⁷。河上はといえば、『社会問題研究』刊行当初はまだマルクス主義に傾倒し始めたころである。したがって、宇野のマルクス経済学入門は、すでに完成された河上の経済学を吸収することではなく、『資本論入門』および『経済学大綱』を到達点とする河上の研究の進展にそった、その意味では河上の思考をたどるかたちでの入門であったことがわかる。なお、河上に直接会ったのが、本文献のタイトルにある外国留学無用論を聞かされた日の一度きりであったことからは²⁸、両者のつながりが人的なものではなく、極めて文献的、学問的なものであったことが理解できる。

2. 『著作集』未収録文献における言及

『宇野弘蔵著作集 別巻』に所載の「宇野弘蔵 著作目録」に記載された文献のうち、『著作集』に未収録の文献において宇野が河上に言及しているものは、以下の文献⑯～㉙である。

- ⑯ 「僕たちの経済学」(『評論』河出書房、第19号、1948年3月).
- ⑰ 「資本論研究——商品及交換過程」(河出書房、1948年11月).
- ⑱ 「経済学の三十年」(『世界週報』時事通信社、第30卷第18号、1949年5月).
- ⑲ 「戦後経済学会の成果と課題」(『経済評論』日本評論社、第5卷第12号、1950年12月).
- ⑳ 「マルクス経済学と私 宇野弘蔵氏に聞く②【第一部 私の学問的遍歴(続き)】」(『エコノミスト』毎日新聞社、第31年第11号、1953年3月14日).
- ㉑ 「経済学四十年」(『社会科学研究——宇野弘蔵教授還暦記念号』東京大学社会科学協会、第9卷第4・5合併号、1958年2月).
- ㉒ 『価値論の問題点』〈経済学ゼミナール(2)〉(法政大学出版局、1963年6月).
- ㉓ 「社会主義と経済学(東京大学経済学部土曜講座、1964年11月)」(『資本論に学ぶ』(UP選書)東京大学出版会、1975年9月).
- ㉔ 「資本論に学ぶ(茨城大学における講演、1965年11月)」(『資本論に学ぶ』(UP選書)東京大学出版会、1975年9月).
- ㉕ 「私と『資本論』——宇野弘蔵氏に聞く」(『図書新聞』図書新聞社、第899号、1967年3月4日).
- ㉖ 『資本論研究Ⅲ——資本の流通過程』(筑摩書房、1967年12月).
- ㉗ 『資本論五十年(上)』(法政大学出版局、1970年2月).
- ㉘ 『資本論五十年(下)』(法政大学出版局、1973年10月).

⑯ 「僕たちの経済学」(1948年3月)

「宇野 向坂君はどうして経済学をやったかね。

向坂 やはり河上さんだね。大阪朝日新聞に「貧乏物語」を——大正六年くらいでしょう——あれを読んでアダム・スミスだのマルクスだのの名前を知ったわけだ。何だか法律より経済学が面白そうだというわけで、別に大したことはない。

宇野 それは皆そうだろう、大体ね。マルクスが経済学を始めたのとは一寸違うね。あれは卒業してから始めたからね。僕らのはどうもボンやりしておるですよ。せいぜいその時の興味からだ。」(29-30頁)

向坂逸郎(1897-1985)は、宇野の大学時代の「ほとんど唯一の友人」(宇野[1970]140頁)である。補論Aで示すように、土屋喬雄(1896-1988)は宇野と向坂が熱心に河上を読んで

いたことを証言している。

⑯『資本論研究——商品及交換過程』(1948年11月)

「相原 その外に河上さんに『資本論入門』がある。」

宇野 あれは『資本論』一巻だけだが、丁寧にやってある、非常に詳しい、社会思想史論から始まって、河上さんはあそこまでもっていったわけですね」(47頁)

雑誌『評論』(河出書房)の企画で、1947年1月から1948年1月までの間に10回ほど開催された『資本論』研究の座談会の記録である²⁹⁾。引用は、『資本論』の解説書に関する話のなかでの発言である。この間、1947年12月に『価値論』(河出書房)が出版されているが、「この研究会が、実はこの価値論を出すきっかけとなった」(⑯1頁)とのちに述べている。

1940年代は、宇野においては2つの時期に区分される。前期は第二審無罪判決(1940年12月)から東大社研に入所する(1947年1月)ころまでの現状分析の研究期であり、後期は『経済原論(上・下)』(宇野〔1950・52〕)へといたる原理論の研究期である。本座談会はちょうどこの転換点にあたるものであると同時に、後述するように、戦後の日本におけるマルクス経済学のはじまりを告げるものとなるのである(⑯B)。

⑰「経済学の三十年」(1949年5月)

「宇野 それはね。僕なんか高等学校から大学へ行く頃でも、東大の先生の名前なんか、全然知らなかったからね。(笑聲)だから、東京へ来たわけで、大学へ来たんじゃない。(笑聲)

向坂 きみなんかもそうだったのかね。(笑聲)

宇野 その当時はむしろ慶應や高商の先生だった福田徳三博士とか京都の河上さんとか米田さんなんかの方がずっと有名で、僕なんかも名前は知ってたね。」(39頁)

文献⑯と同様の内容であるが、ここでは福田の名前も挙げられている。

⑱「戦後経済学会の成果と課題」(1950年12月)

「価値形態論というのは河上さんが早くから問題にされて——もちろんどこの国でも一応は紹介されているのだけれども、日本では最初から相当詳しく問題にされたということが、日本のマルクス研究に非常な影響を与えた。これは河上さんの解釈が正しかったとかどうとかいうことは別ですけれども、刺激としては非常に影響して、おそらくほかの国々のマルクス研究に、あまり取扱われていない部分が、日本では相当詳しくみんなに読まれている。そういうして同時にその中で方法を知ろう、これが経済以外の分野の人にも、いわゆる弁証法のために相当重きをなして取扱われている理由ではないかと思うのです。ヘーゲルとマルクスを並べるという考え方方は、戦前からあることはあっても、そうしてほんとうにそれを取上げた人もありますけれども、まだ具体的に細い点を取上げるということはなかったのです。それ

が戦後はそういう問題まで入って来ている。こういう点は、ちょっと外国にもないのでないですか。」(41頁)

文献⑤⑥と同様に、河上による価値形態論の研究の先駆性が評価されていることにくわえて、国外のマルクス研究においてあまり扱われていない日本に独自の研究の進展にたいしても河上の影響が及んでいることが述べられている。

㉚「マルクス経済学と私」(1953年3月)

A 「なお、当時私たちが非常によく読んだものは河上博士の『社会問題研究』これは入門書として非常に役立ったわけです。『資本論』を読んでからはあまり参考書というものは読まなかった。尤もレニンの著作からは種々と教えられるところが多かったと思います。

ただ、いま一つあげておきたいのは河上博士の『資本論入門』という書物です。はじめは分冊になってパンフレットの形で出たのですが、これは私にとっては特別な意味で非常に影響があったのです。というのは、河上博士は『資本論』の研究に非常に熱心なので、外国では今でもそんなに行われてはいない価値形態論をあの書物で非常に詳細に取扱われているのですが、これは私には非常に興味がある箇所となり、『資本論』の特色のある方法を示したものとして現在までその影響を受けているといってよい。

尤もあの書物の所論を全面的に受けいれるということは出来なかつたのですが。私自身の考え方の上に、価値形態論の重要さを知らせてくれた意味では非常に重要な書物になつてゐるのです。その後はあまり繰り返して読まないから、今どういうことが書いてあったかは覚えていないが、最初に書いた論文もその影響の下にヒルファーディングの貨幣論についての批判をしたのでした。」(46頁)

文献⑦⑮にもあったように、河上の『社会問題研究』が入門書として役立つたことがここでもくり返し述べられている。くわえて『資本論入門』にたいして「今までその影響を受けている」、「非常に重要な書物」との評価を与えている。

B 「『資本論』において価値形態論の有する意義を河上博士が非常に熱心に説かれたということは、我々の『資本論』の研究に、他の諸国で見られないものを与えたのではないかと思う。河上博士は、丁度その当時日本でマルクスの弁証法が問題になつていて、それを経済学の中でつかみたいという意味から価値形態論を重視せられたと思うのですが、その点は間違つていなかつたと思います。」(46頁)

この引用Bは、文献⑯で引用した内容と基本的には同じである。河上による価値形態論の研究の影響は日本の『資本論』研究に国外の研究には還元されない独自性を与えたのであり、それは「ヘーゲルとマルクスを並べるという考え方」(⑯ 41頁)，つまり方法論としての弁証法の把握にまで及んでいるということであろう。

C 「ただ弁証法がよくつかまれていないという批評もあるようですね。

宇野 河上博士にね。それまでの河上博士に特にそういえるのでしょうか。

それできっと価値形態論をやってつかもうとされたのだろうと思うのです。果してそれで正しくつかめたかどうかは問題ですが、価値形態論をやられたということ自体は非常に重要なことだと思う。我々も価値形態論を通じて弁証法というものを学んだわけなんです。

それは単に河上博士の『資本論入門』で価値形態論を学んだというだけでなく『資本論』自身の価値形態論の研究を促進したことになったのです。あの当時、『資本論』初版の一部をリプリントし、それを河上博士が訳されている。こんなことは外国ではなされなかった。日本の『資本論』研究は、ある面からいえば細かすぎるということになるかも知れないが、他の点からいえば、非常に厳密にその方法を学ぶということになったのではないかと思う。

最近邦訳されたアメリカのスウェイジー、あるいはイギリスのドップという人々の書物を見ても、日本のように価値形態論を通して『資本論』の方法は入っているとは思えない。これは『資本論』の理解の上で相当違いを齎らしているのではないかと思う。」(46-47頁)

引用 C では、河上の価値形態論の研究が『資本論』自体の価値形態論の研究の進展に寄与したと発言されているとともに、河上の厳密さが他国と日本との『資本論』の理解の相違に影響を及ぼしたとの言及がなされている。なお、引用にある「『資本論』初版の一部」の「リプリント」は、カール・マルクス原著・大原社会問題研究所編 [1928] である³⁰⁾。

D 「昭和六年改造社の経済学全集で『資本論』の解説をしたことがあります。第一巻は向坂君と柳田さんでしたが、第二巻を私がやることになっていたのです。ところが、後に山田盛太郎君が是非その第三編の再生産表式論をやりたいというので、私は二巻の第一、二編をやったのです。

第二巻は、第三篇は別として、外国でも余り研究されていない。カール・レンナーなどが後にやったのですが、いわゆる流通主義的に俗化しているといってよいと思う。私はむしろ反対に第一巻との関係を十分に考慮しながらやればこの部分はマルクス学説の極めて重要な一面を説き得るものと考えてやったわけです。第三篇の表式論もそうしないと反ってへんなものになる。価値論で価値形態論を重視したように、私は資本論でも資本の流通形態を知らないのは不十分な理解だと思うのです。

実際また、表式論で直ちに恐慌論や崩壊論までやれると思われても困る。第二巻は第一巻と相対応して理解されなければならないものと思うのです。」(47頁)

引用 D は、文献②について述べたものである。これは河上の価値形態論に学んで執筆した文献①の翌年に発表されたものであり、引用にあるように、宇野は『資本論』第2巻のうち、第1編「資本の変態とその循環」と第2編「資本の回転」の解説をおこなっている。この翌年には再生産表式に関する文献③が発表されていることからみると、この時期の宇野の問題意識は、価値形態論から資本の流通形態、再生産表式を含む『資本論』第1巻と第2巻の関連へとつづいていることがみてとれる³¹⁾³²⁾。引用 D には河上の名前は出ていないが、

「価値論で価値形態論を重視したように、私は資本論でも資本の流通形態を知らないのは不十分な理解だと思う」との発言は、第2巻の切り口を価値形態論の重視という観点に見定めるものであり、ここに河上の影響を垣間みることができよう。

② 「経済学四十年」(1958年2月)

A 「しかし卒業するまでは経済学科をやろうとははっきりとは思っていなかった。というのは、一部丙からは東京大学の経済学科には入れなかつたのです。一部甲のいわゆる英法からしか入れなかつた。ところが、私が卒業するときに経済学部が独立することに内定されて、その年から一部丙、丁すなわち独法、仏法からも入つてよろしいということになつた。もちろん、それまでに経済学をぜひやりたいというのだったら、京都大学へ行って、河上博士のもとでやればよかつたわけですが、それほど明確に決心がついていたわけではない。実は東大の経済にどういう先生がいるのかもよく知らなかつたという程度だったのです。まったく子供じみていて、お恥かしい話ですが、経済学をやるというより東京大学に入ることが主だったようです。」(174頁)

大学入学に関する回顧であり、基本的には文献⑭⑮と同じ内容である。

B 「山川さんが私の高等学校三年のころだったと思うのですが、はじめて無名氏というペン・ネームで総合雑誌に書かれ出したのですが、これは全く驚異的なものだった。吉野(作造)氏や大山(郁夫)氏らの民主主義論を批判したものですが、社会主義の理論の強さを知ることができたように思いました。私は非常に感激して読んだものです。最近の山川さんのものにもあの当時の文章と同じ調子の精緻さを感じられて、感心しているわけです。私には河上博士のものより山川さんのものほうがその点では非常に影響が多かったといつていいと思うのです。」(176頁)

社会主義に関して山川から強い影響を受けたことが述べられている。「河上博士のものより」とあることは、河上からは社会主義ではなく価値形態論をはじめとする『資本論』に関する影響が多かったことを示唆しているよう。

C 「問 マルクスなり『資本論』を理解するためにはクラシックが非常に重要だということはまだ普通には認識されていなかったのですか。

宇野 どうですかね。一般的には河上さんの影響でしょう。それはしかし実際にはクラシックをもう一遍やり直してマルクスへというより、マルクスをやることによってクラシックを理解するといったほうがあたるのではないかでしょうか。」(184頁)

スミス、リカードなど古典派経済学の重要性も河上の影響によって認識されたとの見解が示されている。河上は1910年から京都帝国大学において経済学史の講義を担当しており、当初からスミス、マルサス、リカード、ミルについて論じている³³⁾。河上の経済学史研究の集大成は、1920年4月に岩波書店から出版された『近世経済思想史論』(河上 [1920]) お

より『経済学大綱』に下篇として収録されることになる『資本主義経済学の史的発展』(河上 [1923a])であるが、これらもまた日本の経済学の進展に大きな影響を与えたことがわかる³⁴⁾。

D 「問 お帰りになっても『資本論』の勉強は大体独学ですか。

宇野 ええ、そうです。

問 ほかに櫛田さんなんか論文を出し始める……。

宇野 もちろん櫛田さんや河上さんの論文は出ていましたから、独学といつてもこういう先輩からは非常に多くを学びました。多くの場合、マルクス批評家の批評に対する応戦が櫛田さんや河上さん、後には向坂君がやっていた——それを通して『資本論』の復習をしたということが私には非常に大きな役割を占めているといってよい。仙台にいたせいもあるけれども、論戦があるたびに、その論戦の個所をもう一ぺん原本に当てる。それが私にとって非常に勉強になった。

問 たとえば価値論なんかでも櫛田さん流の価値論だったのですか。

宇野 そうです。」(187-188頁)

これもくり返しになるが、留学からの帰国後、独学で『資本論』を学ぶと同時に、櫛田や河上の論文に学んでいたことが述べられている。

E 「問 先生流の価値論に入られたのはいつごろですか。

宇野 だいぶ後です。私は昭和五年頃にヒルファーディングを一度批評したことがある。これは私の最初の論文ですが、それまでに河上さんが価値形態論を非常に詳しく書いておられたので、それによって価値形態論をもってヒルファーディングの貨幣論を批評したわけです。彼の貨幣論はレーニンの『帝国主義論』でも間違っていると書いてあるのですが、どうして間違っているかは書いてない、これはぜひ自分でその間違いの理由を見出してみたいと前から思っていた。河上さんの価値形態論の研究を手がかりにして『資本論』を勉強し直している内にヒルファーディングの批評ができるように思えて来てやったのです。ところがどうも自分にはすっきりしないのです。もっともあの論文は内容的にはカウツキーを利用してやったのですが、カウツキー自身は、価値形態論でやっているわけではない。私は、自分でそれをやってみてそれがどうもうまくゆかないで、マルクスの価値形態論そのものを研究し直すことになり、遡って価値論の論証の仕方にまで疑問をもつことになったのです。また例の『資本論』第一巻と第三巻との矛盾という問題でのマルキストとマルクス批評家との論戦も、私にはどうも納得がゆかないものが残っていた。いわゆる単純商品論で弁解しても片づかないものがある。これは論証の仕方に何か欠陥があるのじゃないかということを割合早くから考えていたのです。しかしそれではどうしたらいいかということになると、すぐには解決できなかった。」(188頁)

文献①についての述懐につづいて、文献⑬でもふれられていたように、河上の価値形態論

の研究をヒントに、マルクスの価値形態論の研究へ、そして価値と生産価格の問題を含む価値論の論証の問題へとすんでいったことが示されている。

㉚『価値論の問題点』(1963年6月)

「商品論で「商品の本質」をさがそうとしているのではないというのは、ここではなお価値形態論を展開すべきでないという考え方から出たとしても、理解しえないことだ。それに「商品の本質」と離れて「もっと基礎的なもっと単純なものである価値とは何か」をどうして「探求」できるのであろう。昔、河上博士が価値人類犠牲説なるものを唱えたことがあったが、それを思い出させるような言葉だ。商品形態以前にも、また商品形態の廃棄以後にも「価値」があるとでも考えているのではないだろうか。そうなると、商品の価値を重さや長さと同じように考える、見田氏のさきに述べた見解も当然といってよいかも知れない。それでは価値形態がわかるはずがない。」(72頁)

この引用では、見田石介（1906-1975）の説を批判するなかで、河上の価値人類犠牲説にふれている³⁵⁾。

㉛「社会主义と経済学」(1964年11月)

「私がはじめて論文を書いたのが、ヒルファディングの『金融資本論』の冒頭の「貨幣の必然性」というところです。日本では、ぼくは直接は習わなかったのですけれども、河上肇というじつにえらい、献身的な『資本論』の研究家がいましたが、ちょうど私の学生のころから『資本論』の研究を非常にやられて、そして『社会問題研究』という個人雑誌を出して、資本論研究をわれわれに教えてくれたわけです。その終わりに近いころ——福本和夫君が日本に帰ってきてから後ですけれども——、価値形態論を一生懸命でやった。価値形態論はほかの国ではありません問題にしていないのではないかですか。私はそれで、非常に価値形態論に興味をもった。そして価値形態論からみると、ヒルファディングの価値形態論というのになっていない。“二十ヤールのリンネルは上衣一着に値する”というのが、“上衣一着は二十ヤールのリンネルに値する”というふうにひっくり返っていても、同じように思っているのです。そういう価値形態論をやっているのですね。これはちょっと困ります。もっとも私がヒルファディングの批評をしたときには、ほんとうはまだ価値形態論がわかっていなかったのです。いまみると、ちょっとお恥ずかしいような論文ですけれども、しかしとにかくヒルファディングが、貨幣論というもののどういうところで間違いをしているかということを、自分で発見したつもりでいるのです。」(102-103頁)

くり返し、文献①についての回顧である。

㉔ 「資本論に学ぶ」（1965年11月）

A 「ちょうど大正十年、私が大学を卒業したときに、非常に安い『資本論』がたくさん入ってきた。ドイツのインフレーションで、本が安く買えるようになったものだから、ドイツからソヴェトのコミニテルンの文献や、その他いろいろなものが入ってきたのです。その中にカウツキー版ですけれども、『資本論』が入っていた。それでさっそく『資本論』を、第一巻ですけれども、手に入れて机の上に置いたのですが、なかなか読めない。それまでにカウツキーの『資本論解説』という書物が訳されていて、それは私、大学生のときに繰り返し読んだのです。河上肇さんやその他の『資本論入門』も少しずつそのころ出たように思います。」（4頁）

文献⑦でも述べられていたように、『資本論』に取り組むに先立って、カウツキーの『資本論解説』を読んでいたとある。

B 「戦後、昭和二十二年だったかと思いますけれども、河出書房から『評論』という雑誌が出て、その編集長が私のところへきて、雑誌の何か評判になるようないいアイデアはないかと言うので、私が一つアイデアを提供したわけです。それは『資本論』を座談会形式でみんなで論じてもらって、それを雑誌に載せたらどうか。一部の人にとっては聖書のような『資本論』を座談会でやるのですから、けしからんと思う人があるかもしれないけれども、研究会としてならいいのじゃないかということで、雑誌『評論』の主催でその研究会をやることになり、初めの一、二回は私や向坂逸郎君が司会したりしていたのですが、三回目に『資本論』の中の価値形態論をとりあげた。これはちょっとおもしろい。ほかの国々では価値形態論なんかは研究されていないのです。日本では河上肇氏が価値形態論を初めて詳しく研究したと私は思うのですが、こういうことも一つの刺激になっていて、私には価値形態論というのは非常に重要なものだという頭ができていた。」（8-9頁）

戦後の『評論』（河出書房）での座談会についての述懐である（⑯⑰）。価値形態論を焦点とする第三回目について、宇野はつぎのように回顧している。「この研究会の第三回の価値形態論のところは、実際はやり直しの二度目の会の速記である。最初のときは、私が価値形態では相対的価値形態にある商品にはその所有者のあることを明確にした方がよいという発言をしたために、研究会は速記ができない程に混乱してしまった。私以外の全部の人がこれに反対して非常な論戦になったわけである。」（⑯1頁）

この座談会はつぎの3点において注目に値する。第1に、引用Bからみてとれるように、宇野が価値形態論をテーマに挙げた背後に、河上の影響があったことである。第2に、座談会が宇野の『価値論』の執筆のきっかけとなったことである（⑰）。第3に、戦後のマルクス経済学の起点ともいいうる宇野と久留間鉄造（1893-1982）との論争が、この座談会をきっかけに引き起こされたことである³⁶⁾。

C 「もっとも私がドイツで『帝国主義論』を手に入れたころには『金融資本論』はまだ

買っていなかった。帰る間ぎわになって、ようやく『金融資本論』を手に入れることができた。そしてそれを持って帰ってきていたので、その「貨幣の必然性」のところを、河上さんから教えられて価値形態論をもった私が、よくよく読み返してみると、ヒルファデイングは価値形態論というものが全然わかっていない。もっとも、あの書物を書いたヒルファデイングというのは三十歳前後ですから、その当時の私とあまりちがってないのですし、むしろ私もよりも若いときに書いたものです。後には社会党のたいへんな領袖になったようすけれども、あの書物を書いたときのヒルファデイングは三十歳前後です。しかもヒルファデイングというのはお医者さんで、大学の医科を出て、それから社会党へ入って経済学をやって、そしてあのたいへんな、ちょっとエポック・メーキングな書物を書いた。しかし、その最初の「貨幣の必然性」というのは、価値形態論がわかっていないのです。それで私は河上さんから教わった『資本論』の価値形態論をもって、ヒルファデイングの「貨幣の必然性」を批評したのです。その当時は今日のような考え方と違いますけれども、しかしとにかく“価値形態論を知らないから、こういう誤りをおかすのだ”という表明をしたのです。」(9-10頁)

この引用Cもまた、文献①についての発言である。

㉕「私と『資本論』——宇野弘蔵氏に聞く」(1967年3月)

A 「しかし高等学校のとき、『新社会』という雑誌でマルクスの『資本論』という本が大変な本だということを教えられ、その後に河上（肇）さんの『社会問題研究』。そういう順序で『資本論』に入門したのです。」(1頁)

『新社会』は1915年9月に創刊されているが、宇野は西雅雄（1896-1944）の影響でこの雑誌に1916年7月から12月ごろにはじめてふれている³⁷⁾。宇野は引用Aにもあるように、『新社会』で『資本論』の偉大さを教えられ、マルクスの名前も『新社会』ではじめて知ったと述べている³⁸⁾。また、「高畠さんの訳したカウツキーの『資本論』解説を『新社会』で読んだ」(㉕1頁)と述べていることから、宇野の『資本論』入門は、カウツキー『資本論解説』→河上『社会問題研究』→『資本論』という順序をたどったことがわかる。

B 「宇野 大学は法科へ行くつもりだったのを経済に変えたのも、『資本論』がわからなくちゃと思ってね。今もいったように高畠さんの訳したカウツキーの『資本論』解説を『新社会』で読んだんですが、はじめは何のことかわからなかった。その頃は『資本論』は勿論、マルクスの名前も知らない人が多かった時代でしょう。高等学校のドイツ語の時間にマルクスとマルサスとを間違えて教えた先生があった位です。河上さんが『経済思想史論』を書いたり、『社会問題研究』を書いたりした大正八、九年、僕が大学へ入って以後、『資本論』も広く知られるようになってきた。その点では、河上さんの普及者としての役割は、大変なものです。」(1頁)

『資本論』をひろく日本に知らしめた河上の功績について語っている。言及されている

「『経済思想史論』」は河上〔1920〕を指しており、その内容はスミス、マルサス、リカード、マルクスの解説である。㉑Cにあったように、『資本論』にくわえて古典派経済学の重要性を喚起する役割を河上が果たしたことは、大きな功績といえよう。

C 「渡辺 先生の戦前の論文にも河上肇の名前が出てくるところが一、二カ所ありますね。「貨幣の必然性」や「表式論」のなかに……。

宇野 教えられたですね。唯物史観や『資本論』の解説を、なんべんもなんべんもやってるし、河上さんとほかの人との論戦も非常な興味をもって読みました。大正十三、四年以後、昭和のはじめにかけては、河上さん、櫛田さん、山川さんらがマルクス側の代表で、高田保馬、小泉信三、のちには土方成美、二木保幾などという人も加わって、盛んに論戦が行われ、これが僕には大変な勉強になった。そういう論文が『改造』や『中央公論』に出るとすぐ、僕はそれと『資本論』をつきあわせてみて、勉強する機会としたもんでした。」(1頁)

これもまた、戦前の論争について語ったものである(⑤A ⑪A)。なお、「唯物史観や『資本論』の解説を、なんべんもなんべんもやっている」と引用Cにあることからは、『資本論入門』に先立つ河上の「マルクス資本論略解」(河上〔1923-26〕)にも宇野が目を通していたことをうかがわせる。

D 「ブディンやウンターマンの解説は、それから河上さんの解説は、大正八、九年ごろ読んだんだが、それすぐに『資本論』が読めるとは感じなかった。カウツキーの解説は『資本論』に即していて、これは熱心に読んだけれど、それでも『資本論』がすぐ読める気はしなかった。」(2頁)

ここでは、河上やカウツキーの解説とあわせて、ブディン(Louis B. Boudin, 1874-1952)およびウンターマン(Ernest Untermann, 1864-1956)の解説を『資本論』を読む前に読んでいると述べている³⁹⁾。

㉖『資本論研究Ⅲ——資本の流通過程』(1967年12月)

「宇野 それは日高君らしい注意でよくわかるし、おもしろいのだが、どうだろう。流通というのを商品だけに限るというのは、少しほげしい。もともとそういうのもいいのかもしれないが、商品の流通の手段としての貨幣という場合にも、じつは貨幣のほうが流通している。これを貨幣は通流だといってあまり通流しないんではないかねえ。前に河上(肇)さんもそういうことをいって区別されたが、続かなかった。どうしてそうなのか。資本では流通でなくて姿態変換をするんだといっても、やはり資本が流通形態たることに変わりはない。資本の運動は、貨幣の流通のように空間的に行なわれるのでなく、時間的な運動であるが、これが商品、貨幣の流通形態を基礎にしている。しかも資本が生産過程を把握してくると、その運動の中に、あるいはその運動を基礎にして商品の流通も、貨幣の通流も行なわれる。資本がいわば運動の主体をなしている。そこでこの三つのものに同じ流通という言葉をつか

いながら意味が異なっているというふうに言うべきだと、ぼくは解している。日高君のように、それぞれ異なる名前をつけて区別すると、かえってその三者を関連づけるときにどうやるかと、そのほうがむずかしいのではないか。」(256頁)

ここでふれている河上の学説は、つぎのものであろう。「交換過程における諸商品の運動は商品流通となって現はれるが、かかる商品流通を媒介する貨幣（商品流通の手段としての貨幣）の運動はその通用または通流となって現はれる。こゝに通流とは貫ぬき流れるといふ意味であって、それは一商品の総変態が一循環を描くのと全く異なる。」(河上 [1932] 410頁)

㉗『資本論五十年（上）』（1970年2月）（宇野 [1970]）

A 「○○ 日本のマルクス経済学の発達のなかでいわば出発点は堺と山川としてその位置というのはどういうもんなんでしょう。というのはその場合ボルシェビズムがはいってきてからなにかみんな戦略規定にいわば埋没しちゃって、それの前提になる理論的なものというのを忘れているようなところがかなりあるような気がするんですけども。

—— さあ、マルクス経済学一般からいえばそれを広めたのはやっぱり河上さんじゃないのかな。大正九年、十年ごろの『社会問題研究』じゃないかなあ。山川さんなんかはブディンとかウンターマンぐらいでしょう。河上さんは、とにかく『資本論』を直接に解説しようとしたんだからね。ぼくは山川さんはとにかく、堺さんからは特に経済学を教わったという気はしない。ぼく自身としてはやはり河上さんだね。マルクス経済学の入門はさきに話したカウツキーの『資本論解説』と河上さんの『発達史論』だった。その内容はもうスッカリ忘れてしまったが……。

○○ まだ大学生のころですか。

—— そうです。それから『社会問題研究』。これは唯物史観を解説したりして、われわれにとってはとにかく唯物史観なるものの、またマルクス経済学なるものの手引きとして大変なものだった。」(96頁)

河上が「『資本論』を直接に解説しようとした」ことを高く評価している。『発達史論』という題名の著作は河上にはないが、大学生のころに読んだということから、文献㉗Bでふれていた『近世経済思想史論』(河上 [1920]) であると考えられる。

B 「○○ アナルコ・サンディカリズムとはっきり区別された意味でのマルクスという方向を自覚されたのはいつごろなんですか。

—— サンディカリズムというのは自然と消えちゃったわけで、ぼくはサンディカリズムがいかんと思ってやめたわけじゃない。むしろマルキシズムを知ろうと思っただけだ。

○○ ただしナルコ・サンディカリズムとディメンジョンの違う面がありますね。排他的なものと言えないところが多少あって。

—— ぼくにとっては、いずれも実践問題ではない。サンディカリズムが直接に思想的に

興味があったのにたいしてマルキシズムはむしろ問題を理論的に解明してくれるものと思っていた。経済学の理論ですが、そういう意味で両者はぼくにとって違った感じで受けられたようだ。だから移るのになにもそこに違和感はなかったと思うんだ。社会主義的思想を受けたというのはサンディカリズムで、マルキシズムから受けたわけじゃないんです。つまり理論づけはマルキシズムから後になって学んだわけです。だから大学時代にカウツキーの解説を読んだにしても、それがすぐ社会主義の思想と結びつくわけじゃなかった。まだほんとうに幼稚な入門時代だったので、むしろその間の関連をつけてくれたのは河上さんの『社会問題研究』ではなかったかと思う。」(149-150頁)

この引用Bには、社会主義的思想とマルキシズムとを関連づけるうえで、河上の『社会問題研究』から影響を受けたことが示されている。

㉙『資本論五十年（下）』（1973年10月）

「○○ 先生が黒板に商品経済の発展の図解を書いて講義されたのをぼくはいまだに覚えている。

—— だけどもその前に、こういう図解というのは誤解を起こしやすいから、用心して理解してほしいということをいつもいっていた。

○○ あれは河上さんの『経済学大綱』にありますね。あれとどこが違っていたのですか、先生のと。

—— ずっと違うよ。あれを真似たのだが、ずっと精密になっているよ、ぼくのほうが。

○○ 一つその図解を披露して下さい。

—— 今もいったように誤解され易いからそのつもりで見て下さい。こういうのです。

○○ なかなかむずかしいですね。

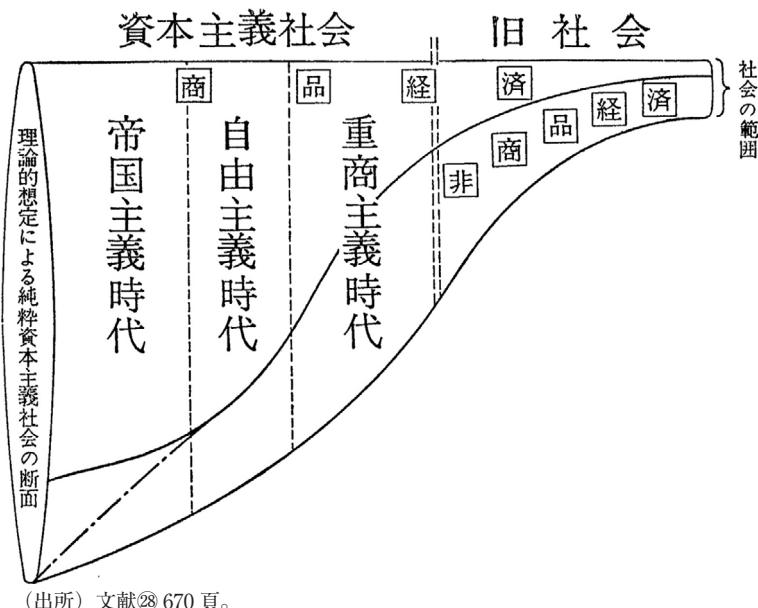
—— それは河上さんよりずっといいだろう。

○○ ただ、アイデアは。

—— 河上さんです、もちろん。ただ、河上さんは商品経済と他の経済関係との関係を図解しただけですね。ぼくのはもっと精密に、しかも全社会が商品経済化した場合の断面を示し、それが年輪のようになって、いちばん中心に価値論があって、全体の構成ができるんだというようなことを考えていたんだな。」(669-670頁)

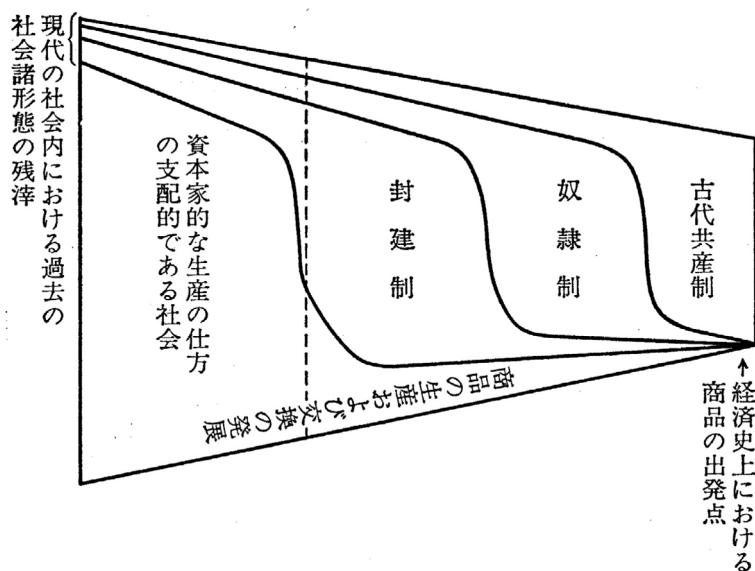
宇野が講義で黒板に書いていた「商品経済の発展の図解」とは、つぎの図1である。

図1 宇野の図その1



宇野が参考にした河上の図は『経済学大綱』に載っていると引用にあるが、『経済学大綱』には同様の図ではなく、発言は誤りである。同様の図は『資本論入門』に掲載されている。『資本論入門』にある図はつぎの図2である。

図2 河上の図



河上の図は、「資本家社会以前における商品の発展史の縮図」(河上 [1932] 111 頁)として示されている。宇野がいつごろの講義でこうした河上の図を参考にした図解を示していたのかは、ここでの引用の限りでは定かではないが、講義においても河上のアイデアを取り入れていたことに、その影響の大きさをみてとることができよう。

3. 新資料における言及

第3節で取り上げる新資料は、以下の②⁹～③⁹である。

- ②⁹ 「社会科学文献批評 経済学一般 高田保馬『経済学』(日本評論社)」(『社会科学』改造社、第5巻第2号、1929年9月).
- ③⁹ 「宇野先生を囲む 経済学入門 座談会」(『経済学友会報』東北帝国大学経済学友会、第3号、1937年11月).
- ③⁹ 「河上肇を語る」(『書物』美松書房、第1号、1950年5月).
- ③⁹ 「経済原論 宇野助教授講述 1936年度」(尚絅学院大学図書館「服部英太郎・文男遺文庫」所蔵)⁴⁰⁾.

②⁹ 「社会科学文献批評 経済学一般 高田保馬『経済学』(日本評論社)」(1929年9月)
「著者高田保馬氏は、周く知らるゝ如く九州帝国大学法文学部の経済原論担任の教授である。そして又最近には、かの河上博士の後を襲って京都帝国大学の教授をも兼ねられ此の四月からは、京都でも経済原論の講義を始められたとのことである。此の著書は、先きに日本評論社の社会経済体系に掲載されたものを、同じくその社の社会科学叢書の第八編として単独に発行せられたものであつて、僅か二百頁余りの小著ではあるが、著者自ら「真剣の努力を注」がれたものであることを認められ、又「此後に、経済原論に関する著書を公にするにしても、根本の考方はこれから余りはなれないであらう」と迄云つて居られるのであって、極めて注目すべきものである。

さて此の書を茲に批評しようといふのであるが、実は、自分は経済学に関してこの書の著者と根本的に考へを異にするのであって、正直のところ此の書の学問的内容には、殆んど何等のインテレストをも持ち得ないのである。只、此の書によって、現在吾が国の大帝國大学が、如何なる経済学を求めるかを、知り得るのではないかといふ点には、非常な興味を覚える。殊に、先きに改造社の経済学全集の第一巻として発行されたる河上博士の経済学大綱の上編「資本家社会の解剖」が、恰も同じ京都大学の経済原論として講義せられたるものであり、此の著書は、云はば其の批評として後を襲ふものであるといふことを考へるとき、益々その感を深くする。河上博士も亦経済学大綱の序文に於いて、その大なる確信と決意とを示

されて居るのであって、両著は、共に充分に徹底的なる、単に理論的たるに留まらず、その社会的意義をも究めたる批評を要求するものである。」(262頁)

文献⑨は、高田〔1928〕の書評である。文献①の前年に発表されていることから、宇野の事実上のデビュー作ということができる。引用は書評の冒頭部分であるが、はやくも河上の名前および『経済学大綱』への言及がなされており、研究のスタートとなる当該文献⑨の執筆時点までに『経済学大綱』を読んでいたことがわかる⁴¹⁾。

⑩「宇野先生を囲む 経済学入門 座談会」(1937年11月)

『『資本論』の参考書は非常にたくさんあるが手近なものについて二三いへば、先づ河上氏の著書は氏の研究の時代々々に応じて経済学の理解の深さが異なることを、時に著しく現はしていることに注意せねばならぬ。『経済学大綱』『資本論入門』の順に読めば、そのことがよく判明される。『資本論入門』が価値形態の解説にかなり努力している点で、あの年代の作としてはなかなか意義深いものがあるだらう。』(59頁)

文献⑩は、1937年5月14日に開催された、第2回目の宇野を囲む経済学入門座談会の速記録の要約である。1938年2月に宇野は検挙されるため、これが東北帝大時代のほぼ最後にあたる文献である。ここでは『資本論』の参考書として『経済学大綱』および『資本論入門』が取り上げられている。デビュー作から1930年代を通じて、一貫して河上の著作に言及がなされていることが、その影響の大きさを示していよう。

⑪「河上肇を語る」(1950年5月)

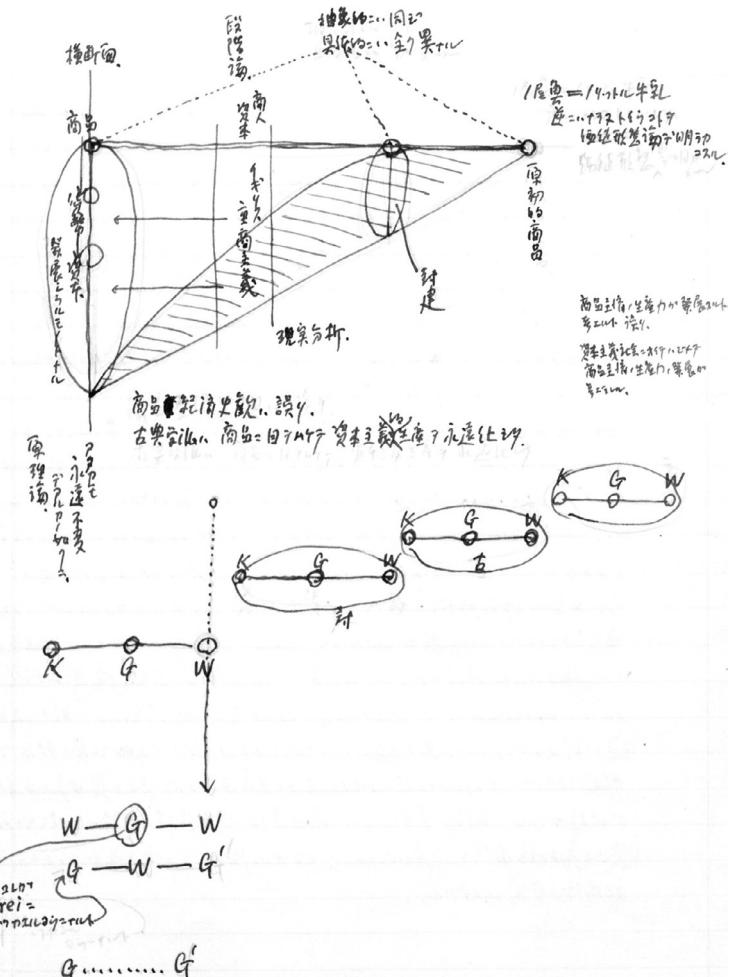
大内兵衛、宇佐美誠次郎らとの座談会の記録である。文献⑮にあった河上の外国留学無用論が披露されている。その他、宇野の発言は少ないが、河上の『社会主義評論』(河上〔1906〕)について読んでいないと述べられているほか(17頁)、河上の『自叙伝』(河上〔1947・48〕)における堀経夫(1896-1981)の話にもふれられている(21-22頁)。

⑫「経済原論 宇野助教授講述 1936年度」(1936年度)

2012年4月以降に公開された、宇野が1936年度にはじめておこなった「経済原論」の講義ノートであり、服部英太郎が筆記したものと考えられる。講義終了後には、東北帝大法文共済部から『昭和十一年度 経済原論 宇野助教授講述』(宇野〔1936b〕)が発行され、のちに『宇野弘蔵著作集 別巻』に「講義プリント「経済原論」」のタイトルのもと収録された(注2)。

文献⑫は、目次を含めこの「講義プリント「経済原論」」と内容は同一のものであるが、ページ番号の3、6、50の各左ページに「講義プリント「経済原論」」にはない図が掲載されている⁴²⁾。このうち、つぎに引用したページ番号3にある図は注目に値する。

図3 宇野の図その2



(出所) 文献②2ページ番号3。

一瞥してわかるように、文献②2でふれた、宇野が河上の図を参考に講義で書いていたという「商品経済の発展の図解」と同様のものである。両図が書かれた時期は30年以上と大きく隔たっているため細部に違いは見られるが、商品経済の範囲が図の右から左にかけて、封建制から段階論をつうじて拡張していることを示し、また左端の横断面が原理論を示していることは、文献②2と文献②2の両図に共通している。いかに図を読み解くのか、詳細は文献②2に書かれている以上には定かではないが、この新資料としての文献②2は、1936年度におこなわれたはじめての「経済原論」の講義において、河上の著作が参考にされていたという事実を明瞭に示している。文献②2は、したがって、この事実を示すうえでの文献的裏付けとしての物証となる。

補論 A 他者による証言

宇野と直接のかかわりのあった人物による、宇野と河上の関連をつづった文献に以下のものがある⁴³⁾。

③土屋喬雄「日本經濟史と三人の先駆者——福田徳三博士と私の經濟史研究」『經濟往来』経済往来社、第11卷第2号、1959年2月)。

④内藤知周「実践家への期待と警告」(『宇野弘蔵著作集 第7卷』岩波書店、月報7、1974年4月)。

⑤斎藤晴造「仙台時代の宇野先生」(『研究年報 経済学』〈経済学部30周年記念〉東北大學經濟学会、特別号、1980年3月)。

③土屋喬雄「日本經濟史と三人の先駆者——福田徳三博士と私の經濟史研究」(1959年2月)

「向坂・宇野の両君は、いずれも田舎者の篤学青年であった。向坂君は福岡県大牟田の出身、宇野君は、岡山県倉敷の産である。共にお国なまりで話していた。この両君は、学生時代から河上博士の著述を熱心に読んだのみならず、堺、山川、荒畠諸氏のような古い社会主義者の文献も勉強し、さらにマルクス、エンゲルスの著書をも研究していた。両君は、助手時代に入り、こうした文献の研究を一層熱心にされたのみならず、スミス、リカードー等古典学派の文献も、カント、リッケルト等の哲学・認識論・科学方法論の諸文献をも熱意をもって強されていた。」(145頁)

土屋喬雄は、大学時代の宇野のクラスメイトである⁴⁴⁾。宇野が「学生時代から河上博士の著述を熱心に読んだ」ことが証言されている。

④内藤知周「実践家への期待と警告」(1974年4月)

「昭和十二年の春、東北帝大法文学部経済科の新入生への説明会で、僕は初めて宇野先生にお会いした。説明の仕事をおしつけられた先生は、「僕は助教授だからねえ」と嫌味をいいながら、説明役を引き受けて、経済学の勉強は『資本論』の研究にほかならぬとされ、入門書として国際共産青年同盟の『無産者政治教程』(経済篇)と河上博士の『資本論入門』をあげられたのには驚いた。」(5頁)

『資本論』の入門書として、宇野が河上の『資本論入門』および『無産者政治教程』(青年コミニテルン編・益田豊彦・冬木圭訳[1928])をあげていたことが証言されている⁴⁵⁾。

⑤斎藤晴造「仙台時代の宇野先生」(1980年3月)

「一体、宇野先生はどうしてあのような価値形態論を考えるに至ったのか、ある時そのき

宇野弘蔵と河上肇

っかけをお聞きしてみた。すると、価値形態論についてまとったものを書いたのは河上さんだけだったので自分も考えてみようと思ったのだ、と。それに、資本論から歴史の部分を消して読んでみたらよく解る筈だと、よく言っておられた。」(29頁)

価値形態論における河上からの影響が証言されている⁴⁶⁾。

補論 B 宇野の旧蔵書について

宇野の旧蔵書は、現在、筑波大学付属図書館「宇野文庫」、法政大学図書館「宇野弘蔵文庫」、東京大学社会科学研究所図書室「宇野文庫」の三ヵ所に分割して保管されており、各機関によってそれぞれが保管する旧蔵書の目録が公開されている。この目録をベースに河上関連の文献を検索すると、以下のとおりである。

筑波大学付属図書館「宇野文庫」

- ・マルクス著・浅野晃訳 [1926] 『哲学の貧困』〈河上肇編纂 マルキシズム叢書 第二冊〉弘文堂書房.
- ・マルクス著・河上肇・宮川實訳 [1927] 『資本論 第一卷 第一分冊』〈岩波文庫〉岩波書店.
- ・マルクス著・河上肇・宮川實訳 [1927] 『資本論 第一卷 第二分冊』〈岩波文庫〉岩波書店.
- ・マルクス著・河上肇・宮川實訳 [1927] 『資本論 第一卷 第三分冊』〈岩波文庫〉岩波書店.
- ・マルクス著・河上肇・宮川實訳 [1927] 『資本論 第一卷 第四分冊』〈岩波文庫〉岩波書店.
- ・マルクス著・河上肇・宮川實訳 [1929] 『資本論 第一卷 第五分冊』〈岩波文庫〉岩波書店.
- ・カール・マルクス著・河上肇・宮川實訳 [1931] 『資本論 第一卷 上冊』改造社.
- ・河上肇・大内兵衛編 [1947] 『河上肇から櫛田民藏への手紙』鎌倉文庫.
- ・河上肇 [1952] 『自叙伝 4』岩波書店.

法政大学図書館「宇野弘蔵文庫」

- ・河上肇 [1920] 『近世経済思想史論』岩波書店.
- ・エンゲルス原著・河野密・林要訳 [1927] 『反デューリング論』〈河上肇編纂 マルキシズム叢書 第八冊〉弘文堂書房.
- ・エンゲルス序・マルクス著・戸張廣訳 [1928] 『自由貿易問題』〈河上肇編纂 マルキシ

ズム叢書 第十六冊〉弘文堂書房.

- ・エンゲルス原著・岡村貞三訳 [1928] 『国際問題』〈河上肇編纂 マルキシズム叢書 第拾七冊〉弘文堂書房.
- ・河上肇 [1929] 『マルクス主義経済学の基礎理論』〈経済学全集 第8巻〉改造社.
- ・カール・マルクス著・河上肇・宮川實訳 [1931] 『政治経済学批判』改造社.

東京大学社会科学研究所図書室「宇野文庫」

- ・所蔵なし

みられるように、宇野がくり返しその影響を語っていた『資本論入門』や『経済学大綱』『社会問題研究』といった文献はいずれの機関にも収蔵されていない。したがって、書き込み等の確認はできないため、旧蔵書を物証として河上の宇野への学問的影響を明らかにすることはできない。

おわりに

以上、確認できたことをまとめておこう。宇野は、河上の著作を『社会問題研究』が発行されるようになってから（1919年1月）は、ほとんどもれなく読んでいた（⑤D⑧⑯）。『資本論』に先立って『社会問題研究』を読んでいたことは（⑦⑧⑯A⑯A），宇野の『資本論』の読み方に当初から河上の影響があったことがうかがわれる。また、河上の主著『資本論入門』と『経済学大綱』については、事実上のデビュー作である文献⑯（1929年9月）の執筆時点までに読んでいる（⑤B⑯）。このことから、宇野は研究・執筆のスタートから河上の学説の影響下にあり、その影響ははじめての論文となる文献①（1930年6月）にみられるように、価値形態論への着目というかたちであらわれたとみてよい（⑤C⑥⑨⑩B⑪A⑬⑯⑯E⑯⑯C⑯C⑯）。

この当初からの価値形態論への着目は、原理論と段階論という二つの理論領域を設ける独自の方法論を萌芽させるものであった一方（⑪B⑯），他方では、宇野を労働価値説の論証の問題へ（⑯⑯E），そして形態に着目した『資本論』第2巻の読解へと向かわせている（⑯D）。さらには、戦後の『資本論』研究の座談会を用意し、『価値論』の執筆へといたる道を切り開くと同時に、宇野・久留間論争という戦後マルクス経済学の始まりを告げるものとなつた（⑯B）。

ここで本稿のはじめの問題意識に立ち戻ろう。1936年度におこなわれた東北帝大時代の一回限りの「経済原論」講義において、商品・貨幣・資本を流通論として独立化させた原理論の構成がはじめて示された。この講義までに河上の著作をほとんど読んでいたことにくわ

えて、文献⑬の図に示されるように、講義の内容自体に河上の著作を利用していた事実は、宇野が自身にとってはじめての「経済原論」講義の内容を河上の著作を参考に組み立てていたことを示すとともに、河上の経済原論の構成を参考に流通論を独立化させる原理論の構成を着想したことを推測させる。もっとも、河上は資本と商品・貨幣とを区別して体系づけているため、流通論という構成・アイデアをそのまま河上に還元することはできないが、その構成・アイデアを生み出すうえでの示唆を与えた最たるものとして河上説を捉えることに、本稿の読者にあっては、もはや異論はないであろう。

補論 C カウツキー著・高畠素之訳『資本論解説』について

本稿では小幡〔2017〕の指摘をふまえ、宇野による流通論の独立化の先駆が河上であることを前提にここまで論をすすめてきた。最後にいったんこの前提を取り戻そう。本稿でみてきたように、宇野は河上から極めて強い学問的影響を受けていたのであるが、本稿で引用した箇所に絞ってみても、このほか山川均や柳田民藏、米田庄太郎からの影響が語られていたことにくわえて、『資本論』の入門書として宇野が読んでいた、あるいは推薦していた著作もまたいくつか挙げられていた。カール・カウツキー著・高畠素之訳〔1919〕(⑦⑨⑩B⑪E⑫A⑬BD⑭AB)、アーネスト・ウンタアマン著・山川均訳〔1921〕(⑮D)、ルイス・ブディン原著・山川均訳〔1921〕(⑯D)、青年コミニテルン編・益田豊彦・冬木圭訳〔1928〕(⑰⑲)である⁴⁷⁾。

ここでは、くり返し言及されていた、カール・カウツキー著・高畠素之訳〔1919〕に注目したい。この著作は主に、『資本論』第1巻を解説したものである。本稿の引用文中に限ってみても、「特に高畠氏訳のカウツキーの解説は非常に興味をもって読んだ」(⑦)、「カウツキーの『資本論解説』という書物が訳されていて、それは私、大学生のときに繰り返し読んだ」(⑬A)、「カウツキーの解説は『資本論』に即していて、これは熱心に読んだ」(⑮D)、「マルクス経済学の入門はさきに話したカウツキーの『資本論解説』と河上さんの『発達史論』だった」(⑭A)、「高畠氏の訳したカウツキーの解説、あれは二年のときだったと思う。これはいっしょけんめいに読んだね、ほんとうに。なんべんも読んだ。どうしても『資本論』をわかると思って」(⑮)——というように、宇野にとって『資本論』入門期における重要な著作であったことがみてとれる⁴⁸⁾⁴⁹⁾。また、宇野のはじめての論文である文献①に関しても、「私の論文は、ヒルファディングの『金融資本論』における「貨幣の必然性」を、カウツキーの所説を利用しながら批判したもの」(⑩B)であり、河上と同様、宇野が研究の当初から参考にしていたことがわかる。

目次をみよう。第一篇は、第一章「商品」、第二章「貨幣」、第三章「貨幣の資本化」の3つの章が、「商品、貨幣、資本」のタイトルをもってひとつに括られている。つづく第二篇

「剩余価値」では、第一章「生産工程」から第十章「機械組織と大工業」が論じられ、第三篇「労働賃銀と資本所得」では、第一章「労働賃銀」から第七章「資本家的生産方法の終了」が論じられている。

ここでは、『資本論』第1巻第1・2篇を「資本の生産過程」から切り離す宇野の原理論構成と形式的には同じ構成がとられている。河上の構成に比して、資本が商品・貨幣と同じ枠をもって括られているため、さらに宇野の構成に近似しているといえよう。カウツキーは、第二篇「剩余価値」の冒頭でつぎのように述べている。

「我々は前篇に於ては主として、商品市場の埒内に動いてみた。商品は如何にして交換され売買されるか。又、貨幣は如何にして其種々なる機能を全うするか。そして労働力なる商品が市場に出現すると共に、貨幣は結局如何にして資本に転化するか。我々は既にそれ等を詳しく調べた。

資本家は市場で労働力を買った。労働力はもう差当り市場では彼に何の用もなさぬ。そこで彼は此買った労働力を携へて、自ら之を消費し利用し得る所に、即ち労働場に引移る。我々は彼に従って、其労働場に赴かう。商品流通の領域を去って、商品生産の領域を調べやう。」(カール・カウツキー著・高畠素之訳 [1919] 124頁)

引用からわかるように、カウツキーは第一篇を「商品市場」ないし「商品流通の領域」と捉えており、市場において資本家が労働力を購買したところまでを含めている。同時に、第二篇以下は「商品生産の領域」とされ「商品流通の領域」と切斷されている。もちろん、宇野 [1950・52] のように、商人資本的形式、金貸資本的形式、産業資本的形式の三形式からなる資本形式論が第一篇において論じられているわけではない。しかし、ここでの引用の限りでは、商品・貨幣・資本を市場の構成要素としてあわせて把握する、宇野の流通論という枠組みに結びつく視角が示されていると捉えられよう。

なお、河上もまた、カウツキー『資本論解説』について言及している。「資本論大意」(河上 [1923b]) は、1923年8月に六日間にわたっておこなわれた『資本論』全三巻の概要についての全六講の講義ノートである (⑤D)。多少長いが「前置」を部分的に引用する。

「第一講から第三講までは、言はば基本論に相当する部分であり、後の半分即ち第四講から第六講までは、各論に相当する部分である。

私が茲に基本論に相当すると云ふところの、第一講から第三講に至るまでの部分は、カウツキーの『資本論解説』の第一篇の内容に相当し、之を資本論そのものについて言へば、第一巻の第一篇および第二篇の内容に相当する。

資本論第一巻第一篇は「商品と貨幣」と題してあり、その第二篇は「貨幣の資本への転化」と題してある。それをそのまま受けて、カウツキーの『資本論解説』(全体ヲ三ツノ篇ニ分ツ) の第一篇は「商品、貨幣、資本」と題してある。資本論第一巻の第一篇および第二篇が、この「商品、貨幣、資本」といふ順序で、是等の問題を取り扱っていると云ふことは、疑ないけ

れども、しかし、もし之を価値といふ方面から言ひ換へるならば、第一篇の「商品と貨幣」といふところでは、価値の実体および形態が取扱はれて居り、第二篇の「貨幣の資本への転化」といふところでは、価値の資本化、即ち資本的剩余価値の発生原因が取扱はれて居る、と見て可いのである。簡単に言へば、第一篇では価値とは何なものであるかが説明されて居り、第二篇では資本に生ずる剩余価値とは何なものであるかが説明されているのである。嘗て『研究』で述べたやうに、資本論は、資本的剩余価値の研究を目的としたものであるから、その総論又は前提として先づ是等の問題が取扱はれているのは、自然だと謂はなければならぬ。

それだけが総論又は緒論であつて、残りの全部は資本的剩余価値の研究に充てられている。」(376頁)

また、第三講の末尾にはつぎのことが示されている。

「資本論の第一篇および第二篇——商品および商品の価値を取扱った有名な二篇——が、資本制の研究の前提として、「単純なる流通」または「商品交換」(資本家的商品の交換ではない)について研究したものだと云ふことは、ただ之を見ても明かである。」(394頁)

ここでは、『資本論』第1巻の第1・2篇は「基本論に相当する部分」であり、『資本論』が目的とする「資本的剩余価値の研究」にたいする「総論又は前提」とみられている。「資本制の研究の前提」であり「単純なる流通」を研究する領域とも捉えられている。そのうえで、価値の観点から、第1篇と第2篇とは説明されている対象が異なるという見方がなされている。ここには、商品・貨幣と資本とを全三巻の体系をみすえてひとつの枠組みをもって括り出す見方と、価値の観点から区分する見方とが同時に示されている。カウツキー『資本論解説』の構成と『経済学大綱』の構成とが交錯しているのである。

このことは、カウツキーの構成の妥当性を一方で認めつつも、独自の観点から第1・2篇を区別する河上〔1923b〕における観点が、『経済学大綱』における「資本の生産過程」からの第1篇の商品・貨幣の分離につながったのではないかという推測をひきおこす。つまり、宇野の先駆としての河上の、さらに先駆としてのカウツキーという可能性である。

もっとも、河上〔1923b〕は『経済学大綱』に5年ほど先立つものであり、また同時期におこなわれた京大での1923年度「経済原論」講義の構成についても、河上自身も認めるように、『経済学大綱』とは「著しくその体系と内容を異にしており、それが甚しくマルクスから遠ざかっていたといふことは、恐らく何人にも推察されうる」ものであった(河上〔1928b〕140頁)⁵⁰⁾。このように極めて時期的にも、そして内容的にも距離があるため、河上〔1923b〕で述べられていることが『経済学大綱』の構成にそのまま反映されていると捉えることには注意が必要であろう。しかしながら、河上がカウツキー『資本論解説』をふまえて述べた自説が、結果としてその形式をとどめたまま『経済学大綱』に落とし込まれている事実は、河上の先駆としてのカウツキーという推測を断定する証左にはならないにせよ、

河上が自身の理論を構築するうえでカウツキーを参考にしていたということの裏付けには少なくともなろう。

注

- * 本研究は、2024年度の東京経済大学共同研究助成費（D24-02）を受けた研究成果である。
- 1) 本稿では、宇野と河上のプロフィール等の紹介はおこなわない。宇野については、降旗 [1968]、大内・鎌倉・林・佐伯 [1979]、大田 [2006]、柴崎 [2024] [2025a] [2025b]、河上については、大内 [1966]、降旗 [1967]、杉原 [2006] を参照されたい。
- 2) 1925年9月に東北帝国大学法文学部における経済学第三講座の担当になって以降、「経済政策論」の講義を担当していた宇野であったが、1936年度に和田佐一郎（1894-1944）の代講で一年間のみ「経済原論」の講義を担当している。宇野 [1936b] は、その際の講義プリントである。この講義プリントをみると、すでに商品・貨幣・資本が括り出され流通論として独立化されているとともに、流通論・生産論・分配論の全三篇からなる宇野の原理論体系の大枠が提示されていることがわかる。
これについて、宇野はつぎのように述懐している。「原論は東北大学にいたとき、一度原論の先生が休んで、僕に代って講義してくれないかというので一年ばかり講義したことがあるだけです。それが東北大学をやめるちょっと前で、確か十一年ごろでしたか、経済政策論を書いた後ですから、大体自分には経済原論の構想ができていたわけです。」(② 47頁)
- 3) 戦後に『経済原論』（宇野 [1950・52]）として提示される宇野の原理論体系は、その骨子を十数年さかのぼった戦前の1936年時点において事実上与えられており、また同じく1936年に段階論体系を披瀝した『経済政策論 上巻』（宇野 [1936a]）が発表されていることからは、宇野理論の事実上の完成が概ねこの時期であったことを示していよう。
- 4) 『経済学大綱』は、1928年10月に経済学全集の第一巻として改造社から刊行された。「上巻 資本家的社会の解剖」と「下巻 資本家的経済学の發展」とから構成されており、うち上巻は1927年4月から1928年3月にかけて京都帝国大学経済学部で実施した「経済原論」の講義をまとめたものである。1928年4月に河上は京都帝国大学の職を追われたため、これが最後の講義となった。他方、下巻は1923年8月出版の『資本主義経済学の史的發展』（河上 [1923a]）に加筆したものであり、これもまた京都帝国大学での「経済学史」の講義を基礎としている。
- 5) 河上の「経済原論」の講義をまとめた『経済学大綱』の上巻「資本家的社会の解剖」では、第一篇「商品および貨幣」が第二篇「資本の生産過程」から分離された構成がとられている。資本についての章である第三章「貨幣の資本への転形」は第二篇「資本の生産過程」の冒頭に位置づけられているため、商品・貨幣に資本をもセットにした第二篇「資本の生産過程」からの分離とまではいかないが、宇野によってなされる流通論の独立化の萌芽が認められる——以上が小幡 [2017] による指摘である。
- 6) なお、1908年8月に京都帝国大学に就職した河上は、1919年から1927年まで、隔年で「経済原論」の講義を全5回おこなっている。第5回目の『経済学大綱』に結実するまでの各回の講義ノートの詳細については、杉原 [1985b] の「附論 河上肇の経済原論講義」を参照されたい。
- 7) 植民史を世界史的観点から論じる矢内原 [1929] では、資本主義の発展が重商主義、自由主義、帝国主義と括られており、またそれを主導する資本の形態が商業資本、産業資本、金融資本と

されている。時期区分等に相違はあるものの、矢内原の論文は「宇野弘蔵の三段階論体系における発展段階論の原型——少なくとも有力な示唆を与えた先駆」(71頁)といえるのではないか——以上が馬場〔2011〕による指摘である。

- 6) 小幡〔2017〕は、『資本論』が時代ごとにどのように読まれてきたかをテーマとするものであり、河上と宇野の学説的関連を資料研究をつうじて明らかにすることを目的とはしていない。馬場〔2011〕は、主題的に宇野と矢内原の学説的関連を追究するものであり、複数の資料を用いてはいるが、「宇野が矢内原論文から直接的影響を受けたとする物証は今のところ見い出せない」というように「形式的内容的共通性」の指摘にとどまっている(81頁)。
- 7) 『著作集』の刊行後に出版された『資本論に学ぶ』(東京大学出版会、1975年)は『著作集別巻』の「宇野弘蔵 著作目録」には未記載であるが、近年発見の新資料と区別するべく、収録されている文献は第2節で扱うこととする。
- 8) 近年発見の宇野弘蔵に関する新資料については、柴崎〔2024〕〔2025a〕〔2025b〕を参照されたい。
- 9) 宇野に関して、『著作集』収録文献からの引用は、すべて『著作集』からおこなう。『著作集』未収録文献からの引用は、すべて初出稿からおこなう。
なお、河上の文献からの引用については、すべて参考文献に掲げた『全集』からおこなう。
- 10) 『資本論入門』は、1928年4月に弘文堂書房から第1巻第1分冊が刊行され、1929年2月までに第8分冊まで刊行された。1929年4月、この八分冊を合本し『資本論入門 第一巻上冊』が弘文堂書房から刊行。この続編にあたる『資本論入門 第一巻中冊』は、1931年2月に同人社から刊行された。これら上冊、中冊にくわえて『資本論 第1巻』の終わりまでを解説した『資本論入門』は1932年11月に改造社より刊行されたが、刊行と同時に発禁となっている。『資本論入門』を収録した『河上肇全集 続2』(岩波書店、1984年12月)および『河上肇全集 続3』(岩波書店、1985年4月)は、この発禁本を底本としている。詳しくは、杉原〔1984〕〔1985a〕を参照されたい。
- 11) この『資本論入門』からの引用については、宇野〔1970〕305-307頁参照。
- 12) 初出稿に記載されている引用頁からたどると、引用もとは1929年4月に弘文堂書房から刊行された『資本論入門 第一巻上冊』である。
- 13) 文献①についての回顧は、宇野〔1970〕299-309頁参照。
- 14) この論争を含む戦前のマルクス経済学の三大論争については、山田〔1979〕を参照されたい。
- 15) 「大正10年が、わが国理論経済学發展の上で没却すべからざる道標となった。」(山田〔1979〕285頁)
- 16) これらの論争について宇野は後年、つぎのように述懐している。「大正の末から昭和の始めにかけての、我が國論壇における『資本論』に関する論争は、私の『資本論』のその後の勉強に非常に役に立ったのであるが、この思いはますます強まってきた。日高君たちは、私がこの論争を「横目」で見ていたようにいっているが、決してそうではなかった。マルクス批評家の論文も、またマルクス主義者側の反論も早速に読んで、その頃勤めていた東北大学の経済研究室で助手諸君と大いに論じたのであった。」(宇野〔1968〕52頁)
- 17) 「価値形態論はやっぱり河上さんがあれだけやったんで、もう一ぺんやり直したわけだ。それは昭和のはじめですね。」(宇野〔1970〕214頁)
- 18) 『社会問題研究』は、弘文堂書房から1919年1月に発刊され、1930年10月までに全106冊刊

- 行された、河上による個人雑誌である。
- 19) 杉原 [1985b] および同 [2006] 206頁を参照されたい。
 - 20) 「『資本論』を何とかして読みたいもんだ、と思うようになったのは、高等学校の二、三年の頃だった。」(宇野 [1957] 88頁)
 - 21) 「大学三年のとき、山崎（覚次郎）先生の演習に参加し、研究室の書庫に入ることを許されたので、そこでいろいろの書物を見ることができたが、そして『資本論』も幾度か手にとってはみたが、どうしても読みかける決心がつかなかった。」(宇野 [1957] 89頁)
- 「そういうわけで『資本論』が読めるようになるつもりで、経済学部に入ったのですが、しかしそこで教わる経済学は、実はつまらない経済学ばかりで、ちっともおもしろくない。それかといって自分で『資本論』が読めるかというと、そうはゆかない。第一に『資本論』自身が手に入らなかった。経済学部の研究室に入ることを許されるようになって、研究室の『資本論』を手にとってはみたが、読めそうにはない。ちょうど第一次世界大戦のために原本は手に入らなかった。英訳本なら手に入らないことはなかったが、折角読むなら原本でと今から思えば子供らしい考えですが、ついに大学の三年間には『資本論』を読むことができなかつた。」(⑪ 385-386頁)
- 22) 「大正十年大学を卒業した年には、ドイツからカウツキー版の『資本論』第一巻が日本に入ってきたので早速求めたのであるが、空しく机上に置かれたままであった。」(宇野 [1957] 90頁)
 - 23) 『社会主義研究』は、1919年4月に堺利彦、山崎今朝弥、山川均によって創刊された雑誌である。小山・岸本編著 [1962] 78頁参照。
 - 24) カール・カウツキー著・高畠素之訳 [1919] は、概ね『資本論』第1巻を解説した著作である。高畠素之 (1886-1928) による翻訳は当初、雑誌『新社会』(壳文社) に連載された。第3巻第6号 (1917年正月) から第5巻第7号 (1919年3月) にかけて、第1篇第1章から第3篇第5章が掲載されている。その後まとめられ、壳文社出版部から1919年5月に、同月には同じ内容のものが三田書房から発行されている (この他、大鎧閣、大衆社からも『マルクス資本論解説』のタイトルで発行されている)。また、改訂版が1924年7月には而立社から、1925年6月にはアテネ書院から発行され、1927年3月には最終版となる改造社版が発行されている。
- なお、原著のタイトルは、*The Economic Doctrines of Karl Marx* であり、1887年に発表されている (改訂版は1903年)。高畠による翻訳書は、壳文社版・三田書房版が原著第13版 (1910年版) に、而立社版・アテネ書院版・改造社版が原著第19版 (1920年版) 基づいている (カール・カウツキー著・高畠素之訳 [1924] 2頁、同 [1927] 1頁)。
- 25) 『我等』は長谷川如是閑 (1875-1969) や大山郁夫 (1880-1955) らによって創刊された大正デモクラシーを代表する総合雑誌である。『解放』は吉野作造 (1878-1933) や福田徳三 (1874-1930) が関わった大正期の代表的な総合雑誌である。『新社会』は1915年9月、堺利彦 (1870-1933) によって創刊された雑誌である。『太陽』は1895年1月に創刊された明治・大正期の代表的な総合雑誌である。
 - 26) 「○○ 先生の時代によく出てくるのは、河上肇の『貧乏物語』なんか見て社会主義的なそういう貧乏に対する関心をもったというのがかなり共通しているのではないですか。
- それがぼくにはぜんぜんないんだ。
- 先生も河上肇の影響を受けていないのではないでしょう。
- あとでは……。しかし『貧乏物語』は、ぼくは読んでいない。いまだに読んでいない

んだ。『第二』のほうは読んだけれど、それはあとのことだ。」(宇野 [1970] 27 頁)

- 27) 宇野 [1970] に同様のつきのような回顧がある。

「○○ 河上肇の『社会問題研究』は？

—— あれはいつごろだったか、大学に入って後のことだと思うが、最初からずうっと読んだ。

○○ 相当影響を受けてるんですね。

—— ええ、影響受けてる。

○○ 大学の二年のときですね。

—— そう、経済学入門の時代です。

○○ 大学一年の終わりから二年の初め？

—— そうですね。それに高畠氏の訳したカウツキーの解説、あれは二年のときだったと思う。これはいっしょうけんめいに読んだね、ほんとうに。なんべんも読んだ。どうしても『資本論』をわかるうと思って。」(131 頁)

- 28) 外国留学無用論については、文献⑪ 20 頁、宇野 [1970] 184-186 頁を参照されたい。

- 29) 文献⑯には第 5 回まで、残りの回は向坂・宇野編 [1949] に収録されている。

- 30) このリプリントについては、河上 [1928a]、長谷部 [1929]、長谷部 [1967] を参照されたい。

- 31) 文献②に先立って、文献①の発表後に宇野 [1931] が発表されている。いわゆる分配論を対象に賃銀、利潤、地代の形態ないし労働者、資本家、土地所有者の資本的形態を説明する小論であるが、これも形態という観点から論じられていることからして河上の影響下にあるものといえよう。

- 32) この時期については、宇野 [1970] 326-330 を参照されたい。

- 33) 平井 [1982] 494-495 頁参照。

- 34) 杉原 [2006] は、1921 年前後「古典派研究の一中心として学会に大きな影響力をもっていた指導的存在」と河上を評している (187-188 頁)。

- 35) 値値人類犠牲説は、河上 [1922・23] で展開された。

- 36) 久留間 [1957] 44-47 頁参照。宇野・久留間論争については、降旗編 [1979] 66-74 頁、種瀬・富塚・浜野編 [1984] 360-372 頁を参照されたい。

- 37) 「『新社会』なんていう雑誌をぼくは知らなかったけれど、西が岡山に帰ってきてから初めて知ったのです。」(宇野 [1970] 27 頁)

西は「ぼくが高等学校一年の終りに、兵隊へ行くため帰ってきた。……たしか七月だったと思うが十二月に兵隊にとられて鳥取に行くまで、ぼくの近くに下宿していたんです。……岡山の古本屋をずうっとあさって歩いてその間に『コンクエスト・オブ・ブレッド』を見つけたり、『新社会』が岡山で買える店があるということを発見してきたりしているんです。それでぼくも『新社会』を読むことになったわけだ。」(同上書 46-47 頁)

- 38) 宇野 [1970] 53, 104 頁参照。

- 39) ここでいう解説は、管見ではアーネスト・ウンタアマン著・山川均訳 [1921]、ルイス・ブディン原著・山川均訳 [1921] である。

- 40) 服部英太郎・文男遺文庫は、服部英太郎 (1899-1965)、服部文男 (1923-2007) 父子の蔵書やノート類などの資料である。2012 年 4 月に尚絅学院大学に開設、うち講義ノートなどは 2014 年度にデジタル化され、現在は尚絅学院大学学術機関リポジトリにて一般公開されている。当該文献⑩は、服部英太郎・文男遺文庫において「ノート及びバインダー類」に分類され、「39_

「経済原論」のタイトルが付されている。

- 41) 文献②の引用文中にある「河上博士も亦経済学大綱の序文に於いて、その大なる確信と決意とを示されて居る」というのは、つぎのような文章をさすのであろう。

「要するに私は、最初ブルジョア経済学から出発して、多年安住の地を求めつゝ、歩一歩マルクスに近づき、遂に最後に至って、最初の出発点とは正反対なものに転化ししたのである。かかる転化を完了するために、私は京都大学で二十年の歳月を費した。このことは、私の魯鈍を証明するのは外ならぬが、しかしながら、私の現在の立場をもってマルクス説に対する無批判的な盲信に立脚するものとなす一部の世評に対して、或ひは一の抗弁となすに足るであろう。顧みれば、私のマルクス説への完全なる推移は、軽蔑に値するほどの年に亘る躊躇と折衷的態度との後に、わずかに実現されたものである。だが思索研究の久しきを経て漸く茲に到達したる代りには、私は今たとひ火にあぶられるとも、その学的所信を曲げがたく感じている。」(河上 [1928b] 140-141頁)

- 42) ノートは見開きで、各右ページに文章が書かれている。またノートには目次のほか、ページ番号が1から57まで付されている。

- 43) この他、直接の証言ではないが、河上と宇野の学問的交渉について記したものに、馬渡 [1983]、降旗 [1984] がある。

馬渡 [1983] は、河上と宇野を対比しつつ、宇野における河上の影響について、つぎのようにふれている。「その頃、河上は京都大学で経済原論と経済学史を交互に講義しており、宇野は東京大学の学生であった。河上のマルクス経済学の基本文献の解説によって、宇野はマルクスの経済学に開眼した。だから宇野は青年期の河上の影響を終生忘れることがなかった。」(203頁)

降旗 [1984] には、河上の価値形態論が、河上と宇野および櫛田の学問的交渉を促し、日本に独自のマルクス経済学研究が構築されていったことが記されている。「この価値形態論に対する河上の執拗な格闘、とくにその弁証法的性格の強調に対して、強い関心をもったのが宇野弘蔵であった。」(3頁)「河上の価値形態論をめぐる苦闘の成果が、宇野によって継承・彌琢され、その基礎の上に、わが国独自のマルクス経済学体系は構築されることになったのである。」(3頁)「櫛田は、この宇野の指摘によって、はじめて河上の価値論研究の水準と、価値形態論の意義に強く注目したようである。」(4頁)

- 44) 宇野 [1970] 140-141頁参照。

- 45) 文献⑯では、『無産者政治教程』にたいして「あれはいいですよ」(47頁)との肯定的なコメントを残している。

- 46) 斎藤 [1983] 65頁参照。

- 47) 文献⑳では、ローザ・ルクセンブルグ著・佐野文夫訳 [1926]、ラビドス・オストロヴィチヤノフ共著・橋本弘毅訳 [1937] のほか、櫛田民藏の著作が『資本論』の参考書として挙げられている(59-60頁)。

- 48) この他、カウツキー『資本論解説』について宇野は、「『資本論』についてとにかくまとまつたものは初めて読んだわけだ。ずいぶん熱心に読んだなあ」と回顧している(宇野 [1970] 132頁)。

- 49) 宇野は高畠訳のカウツキー『資本論解説』を『新社会』の連載時(1917年正月～1919年3月)に読んでいるが(㉕1頁)、「雑誌に出てる間はつづけては読まなかつた、というより読めなかつた。ほんとうに読んだのは大学に入って単行本になつてからだ。それはいまも持つてゐるけど、くり返し何べんも読んだ」(宇野 [1970] 88頁)と述懐している。筑波大学付属図書館「宇野

- 文庫」に収められている 1919 年発行の壳文社版の『資本論解説』(請求記号: 宇野文庫-441, 資料 ID: 10096012944) が、ここでいう今も持っている単行本にあたろう。
- 50) 河上の 1923 年度の「経済原論」講義の構成については、杉原 [1985b] 418-421 頁参照。

参考文献

- アーネスト・ウンタアマン著・山川均訳 [1921] 『マルクス経済学』大鎧閣。
- 宇野弘蔵 [1929] 「経済学入門書の推薦」『社会科学』改造社、第 5 卷第 2 号。
- 宇野弘蔵 [1931] 「賃銀・利潤・地代」『中央公論』中央公論社、第 46 年第 1 号 (第 516 号) (『宇野弘蔵著作集 第 5 卷』岩波書店、1974 年)。
- 宇野弘蔵 [1936a] 『経済政策論 上巻』弘文堂書房 (『宇野弘蔵著作集 第 7 卷』岩波書店、1974 年)。
- 宇野弘蔵 [1936b] 『昭和十一年度 経済原論 宇野助教授講述』東北帝大法文共済部 (『宇野弘蔵著作集 別巻』岩波書店、1974 年)。
- 宇野弘蔵 [1950・52] 『経済原論』(上・下) 岩波書店 (『宇野弘蔵著作集 第 1 卷』岩波書店、1973 年)。
- 宇野弘蔵 [1968] 「マルクスと私」『思想』岩波書店、第 527 号 (『宇野弘蔵著作集 別巻』岩波書店、1974 年)。
- 宇野弘蔵 [1970] 『資本論五十年 (上)』法政大学出版局。
- 大内秀明・鎌倉孝夫・林健久・佐伯尚美 [1979] 『宇野弘蔵——著作と思想』有斐閣。
- 大内兵衛 [1966] 『河上肇』筑摩書房。
- 大田一廣 [2006] 「宇野弘蔵」、鈴木信雄責任編集『日本の経済思想 2』〈経済思想 第 10 卷〉日本経済評論社。
- 小幡道昭 [2017] 「資本主義の歴史的発展と『資本論』の読み方」、21 世紀におけるマルクス——『資本論』刊行 150 年記念シンポジウム (2017 年 9 月 16 日、武藏大学) 報告論文、https://gken.jp/pub/daskapital150sympo_main.pdf、(参照 2025 年 10 月 8 日)。
- カアル・マルクス原著・大原社会問題研究所編 [1928] 『原文対訳 資本論初版首章及附録』弘文堂書房・同人社書店。
- カール・カウツキー著・高畠素之訳 [1919] 『マルクス資本論解説』壳文社出版部。
- カール・カウツキー著・高畠素之訳 [1924] 『改訂資本論解説』而立社。
- カール・カウツキー著・高畠素之訳 [1927] 『改訳資本論解説』改造社。
- 河上肇 (千山万水樓主人) [1906] 『社会主義評論』読売新聞社 (『河上肇全集 3』岩波書店、1982 年)。
- 河上肇 [1920] 『近世経済思想史論』岩波書店 (『河上肇全集 10』岩波書店、1982 年)。
- 河上肇 [1922・23] 「マルクスの労働価値説——小泉教授の之に対する批評について」(1-3) 『社会問題研究』弘文堂書房、第 39 冊～第 41 冊 (『河上肇全集 12』岩波書店、1982 年)。
- 河上肇 [1923a] 『資本主義経済学の歴史的発展』弘文堂書房 (『河上肇全集 13』岩波書店、1982 年)。
- 河上肇 [1923b] 「資本論大意」(未発表ノート) (『河上肇全集 続 4』岩波書店、1985 年)。
- 河上肇 [1923-26] 「マルクス資本論略解」『社会問題研究』弘文堂書房、第 45 冊～第 56 冊・第 58 冊・第 60 冊・第 61 冊・第 65 冊～第 67 冊 (『河上肇全集 続 4』岩波書店、1985 年)。
- 河上肇 [1928a] 「例言」、カアル・マルクス原著・大原社会問題研究所編 [1928] 『原文対訳 資本論初版首章及附録』弘文堂書房・同人社書店 (『河上肇全集 16』岩波書店、1984 年)。

- 河上肇 [1928b] 『経済学大綱』〈経済学全集 第一巻〉改造社 (『河上肇全集15』岩波書店, 1982年).
- 河上肇 [1932] 『資本論入門』改造社 (『河上肇全集 続2』岩波書店, 1984年).
- 河上肇 [1947・48] 『自叙伝』(1-4) 世界評論社 (『河上肇全集』(続5~続7) 岩波書店, 1985年).
- 久留間鉄造 [1957] 『価値形態論と交換過程論』岩波書店.
- 小山弘健・岸本英太郎編著 [1962] 『日本の非共産党マルクス主義者——山川均の生涯と思想』(さんいち・らいぶらり27) 三一書房.
- 斎藤晴造 [1983] 「仙台とマルクス」, 故斎藤晴造先生追想文集編集委員会編『紫煙珈琲』(故斎藤晴造先生追想文集) 故斎藤晴造先生追想文集編集委員会.
- 向坂逸郎・宇野弘蔵編 [1949] 『資本論研究——流通過程』河出書房.
- 柴崎慎也 [2024] 「宇野弘蔵に関する新資料の解説——1921-1949」『東京経学会誌(経済学)』東京経済大学経済学会, 第323号.
- 柴崎慎也 [2025a] 「宇野弘蔵に関する新資料の解説——1950-1977」『東京経学会誌(経済学)』東京経済大学経済学会, 第325号.
- 柴崎慎也 [2025b] 「宇野弘蔵 著作目録」『東京経学会誌(経済学)』東京経済大学経済学会, 第327号.
- 杉原四郎 [1984] 「『資本論入門』校異」『河上肇全集 続2』岩波書店.
- 杉原四郎 [1985a] 「解題」『河上肇全集 続3』岩波書店.
- 杉原四郎 [1985b] 「解題」『河上肇全集 続4』岩波書店.
- 杉原四郎 [2006] 『杉原四郎著作集III——学問と人間 河上肇研究』藤原書店.
- 青年コミニテルン編・益田豊彦・冬木圭訳 [1928] 『無産者政治教程 第1部』叢文閣.
- 高田保馬 [1928] 『経済学』(社会科学叢書 第八編) 日本評論社.
- 種瀬茂・富塚良三・浜野俊一郎編 [1984] 『資本論体系 第2巻——商品・貨幣』有斐閣.
- 長谷部文雄 [1929] 「訳者例言」, マルクス著・長谷部文雄訳 [1929] 『資本論初版鈔』(岩波文庫) 岩波書店.
- 長谷部文雄 [1967] 「『資本論』初版以後とその各国における普及状況」『立命館経済学』立命館大學経済学会, 第16巻第3・4号.
- 馬場宏二 [2011] 『宇野理論とアメリカ資本主義』御茶の水書房.
- 平井俊彦 [1982] 「解題」『河上肇全集13』岩波書店.
- 降旗節雄 [1967] 「河上肇」, 日高普・林健久・桜井毅・渡辺寛・降旗節雄・鈴木博 『日本のマルクス経済学——その歴史と論理(上)』青木書店.
- 降旗節雄 [1968] 「宇野弘蔵」, 日高普・林健久・桜井毅・渡辺寛・降旗節雄・鈴木博 『日本のマルクス経済学——その歴史と論理(下)』青木書店.
- 降旗節雄編 [1979] 『宇野理論の現段階1 経済学原理論——論争史的解明』社会評論社.
- 降旗節雄 [1984] 「河上・柳田・宇野と価値形態論」『河上肇全集 続2巻』岩波書店, 月報29.
- 馬渡尚憲 [1983] 「河上肇と宇野弘蔵——日本のマルクス主義の心と理性」『別冊経済セミナー——マルクス死後100年』日本評論社.
- 矢内原忠雄 [1929] 「世界経済発展過程としての植民史」, 矢作栄蔵編『経済学研究 第一巻 経済篇』(山崎教授還暦祝賀記念) 日本評論社.
- 山田盛太郎 [1979] 「わが国における経済学発展の特異性」『日本学士院紀要』日本学士院, 第36巻特別号 (『山田盛太郎著作集 第一巻』岩波書店, 1983年).

宇野弘蔵と河上肇

ラビドス・オストロヴィチヤノフ共著・橋本弘毅訳 [1937] 『新経済学入門 上巻』慶應書房.
ルイス・ブディン原著・山川均訳 [1921] 『マルクス学説体系』〈アルス社会科学叢書〉アルス.
ローザ・ルクセンブルグ著・佐野文夫訳 [1926] 『経済学入門』叢文閣.